

ISSN 1342-2405

D.H.ロレンス研究

第27号

2017

日本ロレンス協会

目次

特集 マモン神に抗って——モリス、ロレンス、オーウェル

ポール・モレルの「レッサー・アーツ」

——ウィリアム・モリスからD・H・ロレンスへ

..... 川端 康雄 3

ゴードン・コムストックの金銭感覚

——ジョージ・オーウェル『葉蘭をそよがせよ』における拝金主義批判

..... 福西 由美子 19

研究ノート

ロレンスの「眠り姫」物語——「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」の場合

..... 横山 三鶴 34

書評

Richard Owen, *Lady Chatterley's Villa: D H Lawrence on the Italian Riviera*

..... 山田 晶子 53

David Game, *D. H. Lawrence's Australia: Anxiety at the Edge of Empire*

..... 加藤 彩雪 57

日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』

..... 武藤 浩史 63

D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』

..... 井出 達郎 67

近藤康裕『読むことの系譜学——ロレンス、ウィリアムズ、レッシング、

ファウルズ』..... 遠藤 不比人 72

D. H. ロレンス著、小野寺健・武藤浩史訳『息子と恋人』

..... 増口 充 77

ロレンス研究文献	87
事務局からのお知らせとお願い	92
大会研究発表のための助成金制度	94
和田静雄海外研究発表助成制度	97
大会報告	99
会計報告	106
『D. H. ロレンス研究』第28号原稿募集要項	110
会則	112
役員一覧	115
編集後記	117

特集

マモン神に抗って——モリス、ロレンス、オーウェル

ポール・モレルの「レッサー・アーツ」
——ウィリアム・モリスからD・H・ロレンスへ

川端 康雄

はじめに

D・H・ロレンスは晩年のエッセイ「ノッティンガムと炭坑のある田園地帯」（1930年）のなかで、「19世紀に人間の精神を裏切ったのは醜悪さであった」と断言している。ヴィクトリア朝に富裕層と産業推進者が犯した大罪とはなにか。それは労働者たちを貶めて「醜悪な環境、醜悪な理想、醜悪な宗教、醜悪な希望、醜悪な愛、醜悪な衣服、醜悪な家具、醜悪な家、醜悪な労使関係」へと追いやったことだった。「人間の魂はパンよりもっと現実の美を必要としている」（“Nottingham” 291-92）というのに。

これはウィリアム・モリス（William Morris, 1834-96）を長年読んできた者にとっては、芸術創造の観点から産業主義を批判したモリスの社会思想がロレンスに直に流れ込んでいることを証す発言であるように思える。「衣服」、「家具」、「家」への言及はモリスの言う「レッサー・アーツ」すなわち装飾芸術であり、ロレンスはこれらを人間の魂に必要な「現実の美」（actual beauty）の重要な部分に含めている。

ロレンスの小説作品のなかにも装飾芸術への関心が見られる。『息子と恋人』でポール・モレルは事務職のかたわら絵画修行に加えデザイン制作に励み、リパティ商会に自作のテキスタイル・デザインを供給する。絵付も学ぶ。青年期のポールの苦闘のなかでこの活動はどのように位置づけられるのだろうか。あるいは『虹』における教会建築や工芸の話題（ジョン・ラスキンが言及される）は、小説世界といかなる有機的な関係をもつのだろうか。

モリスの芸術論および社会主義思想は、先人のトマス・カーライルやラスキンの思想とともに、20世紀に入って（特に第一次大戦以後）モダニズムの興隆を契機に忘却されたとする見方が少し前まで支配的だったが、それはいま修正されつつある¹。本論文では、ラスキン、モリス、アーツ・アンド・クラフツ運動からロレンスまで、いかなる系譜が考えられるのか、そしてその系譜にいかなる意義を見出せるのかを、ロレンスの『息子と恋人』を中心に考えてみたい。

I 「マモン」の定義

本特集のタイトル「マモン神に抗って」の「マモン」についてまず確認しておきたい。“mammon”を手元の英和辞典で確認すると、

- 1 (悪の源としてみた) 富, 財貨, 金. cf. 『聖書』 Luke 16: 9, 11, 13:
- 2 《しばしば M—》マモン神, 富の神: 富を悪霊または神格として擬人化したもの (『ランダムハウス英和大辞典 (第2版)』小学館, 電子辞書版)

とある。そこで「ルカの福音書」の該当箇所を欽定訳英語聖書で当たってみると、こう書かれている。

No servant can serve two masters: for either he will hate the one, and love the other; or else he will hold to the one, and despise the other. You cannot serve God and mammon. (Luke 16: 13)

〔いかなる僕も二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛してしまうか、一方に寄り添って他方を蔑むかしてしまうためである。あなたがたは神とマモンに兼ね仕えることはできない。〕

この文脈からすると、「マモン」はすでに擬人化（というか「擬神化」）されているので、上記の『ランダムハウス大英和辞典』の第一の定義に加え、第二の定義にも半ば掛かっているとみてよいだろう。『オクスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary: OED*)の定義では以下のようになっている。

a. Originally: inordinate desire for wealth or possessions, personified as a devil or demonic agent (now *rare*). In later use (from the 16th cent.) also (with more or less personification): wealth, profit, possessions, etc., regarded as a false god or an evil influence. / In quot. OE used as a proper name for the Devil in his aspect as instigator of avarice [. . .] In quot. 1667 used as a proper name for one of the fallen angels.

〔もともとは富へのただならぬ欲求，所有欲，悪魔あるいは悪魔の手先として擬人化される（いまは稀）．さらに後年（16世紀頃から）の用法では（これも多かれ少なかれ擬人化されて）：富，利益，所有など，偽の神もしくは邪悪な力とみなされるもの．／古英語の用例では悪魔における強欲の煽動者としての側面を示す固有名詞として用いられた．〔中略〕1667年の用例では墮天使の一人を示す固有名詞として用いられている．〕

さらに，“mammon”を用いた語句のひとつに“mammon worship”（マモン崇拜）があって，*OED*の初出例はトマス・カーライル（1795-1881）の1832年の文章を挙げ，“mammon worshipper”（マモン崇拜者）はJ・S・ミルの1836年の論文に見られること，また派生語として“mammonism”があり，この初出はカーライルの『過去と現在』（*Past and Present*, 1843）に見えることが，おなじく*OED*で確認できる．

じっさい，19世紀半ば，繁栄を極めてイギリスで，インダストリアリズムがもたらした負の側面を直視し，警告を発した批評家たちのなかで，“mammon”の語を盛んに用いたのがカーライルだった．『過去と現在』は，工場労働の非人間性，労働者の悲惨な境遇を等閑視する自由放任主義レッセフェールと産業資本主義の道義心の欠如を激しく糾弾している．その際に彼は，同時代のなほはだしい「無秩序」を12世紀イギリスのセント・エドマンズベリー修道院における「秩序」だった静謐な暮らしと比較し，19世紀における「マモン神」への信奉（拝金主義）を繰り返し批判している．『過去と現在』の第3部第2章，まさしく“Gospel of Mammonism”（マモンイズム＝拝金主義の福音）と題する章でカーライルはこう言う．

たしかに当面われわれは、われわれの〈マモンの福音〉(our Mammon-Gospel)でもって、奇妙な結論に至ることを認めなければならない。われわれは〔いまの世の中を〕「社会」と称し、それでいて完全な分離、孤立を説くように努めている。われわれの暮らしは相互扶助ではなく、むしろ「公正な競争」と称するしかるべき戦の法の下に被われて、互いに敵意をむきだしにする状態になりはてている。現金の支払いだけが人間関係ではないということを、至る所で人びとはすっかり忘却してしまっている。(Carlyle 148)

もっとあと(第3部、第10章)では、「現金の支払いというものが人と人をつなげる絆であったためしはないし、数年でもそうなる見込みはない。〔中略〕現金が世界の目的となりうるなど、過去にもありえなかったし、いまも今後もそうなるはずもない」(Carlyle 189-90)と述べ、「マモニズム」=拝金主義を弾劾している。こうした「マモニズム」に墮した当今の情勢に比べて、12世紀の人びとは、封建制度化にありながら、おのれの本分をわきまえ、正しく生きていた。そこにはまっとうな社会というものが存在した。それは自由放任経済のもとでは失われてしまったものである——そうカーライルは言う。ここでカーライルは「中世主義」の立場、すなわち中世の諸芸術や社会制度を、近代以降、工業化によって民衆の暮らしが損なわれてしまう以前の、よりよい時代とみなして、それを基準として19世紀のイギリスが墮落の一途を辿っていると見る立場に傾倒している。

II モリス、ロレンス、オーウェルの「マモン」批判

ウィリアム・モリスは、このレッセフェール批判、本特集のタイトルで言えば、「マモン神に抗」う姿勢を、いま見たカーライル、さらにはオーガスタス・ピュージン、ラスキンといった中世主義者たちから引き継いで自身の活動をおこなっていったと見ることができる。これらの先人のなかではラスキンの影響が最も濃厚であり、自身それを認めているのだが、カーライルの一連の著作にも強い影響を受けていたことが確認できる。

モリスが政治的コミットメントを行うのは1876年に東方問題に関与してからのことで、そのとき42歳だった。当初自由党急進派の枠内で活動していたのが、次第に左傾し、1880年代には社会主義者となる。1884年にはマルクスの『資本論』第一巻をフランス語版で熟読している。デザイナーとしてもピークを迎えていたこの時期に、草創期の社会主義運動の活動家として、政治、芸術をめぐる講演を盛んにおこない、主要な講演は単行本化され多くの読者を得ていた。1883年にオクスフォードでの講演で自身が社会主義者であることを宣言しているが、そのときの演題は“Art Under Plutocracy”（「金権政治下の芸術」）だった。モリスの場合も「拝金主義」批判のトーンが強くあることがこのタイトルだけでも見て取れる。

「マモン」に言及したモリスの文章をひとつ見ておく。社会主義同盟（1884年結成でモリスは創立メンバーの一人）の機関紙『コモンウィール』に寄稿した論説文「なぜわれわれはパリ・コミューンを祝うか」の終わり部分である。

彼ら〔パリ・コミューンの闘士たち〕が連中のなかに見たのはたんなる政敵ではなく「社会の敵」、おなじ世界に生きることのできない連中だった。相容れないのは人生観の土台が異なるためだった。つまり彼らは財産でなく人間を土台としたのである。だからこそ〈コミューン〉の崩壊はブルジョワの神たる〈マモン〉に捧げられる生け贄（such hecatombs sacrificed to the bourgeois god, Mammon）によって祝われたのだ。〔中略〕同様にわれわれは彼らを来たるべき新世界の礎石として称えるのである。（Morris, “Why We” 234-35）

このくだりでモリスは、1871年に蜂起したパリ市民が政治的に敵対した相手は人生観の基本を人間性でなく財産所有に基づいている連中、すなわち「社会の敵」が相手であって、そこで倒れた市民は「ブルジョアの神」たる「マモン」の生け贄にされたのだと言っている。モリスにとっては「マモン」なき世界が理想社会の要件ということになる。じっさい、『コモンウィール』に1890年に連載した『ユートピアだより』はそうになっている。19世紀末のロンドンから未来のロンドンに突然入り込んだウィリアム・ゲストは、澄み渡っ

たテムズ川で朝の水浴をしたあと、船頭を務めてくれたディック青年に金を支払おうとして料金を尋ねる。

それでわたしは上衣のポケットに手を入れて、「いくらかね?」と言った。まさか真摯に船賃をやるのじゃあるまいな。どうもまだ落ち着かない。

相手は困惑した表情を浮かべた。「いくらか、ですって? おたずねの意味がよくわかりません。潮のことですか? それならまもなく変わる頃です」

わたしは恥じ入ってしまった。それで口ごもりつつ言った。「おたずねしてもどうか悪くおとりにならぬよう。悪気はないのです。ですが、どのようにお支払いしたらよろしいのでしょうか。見てのとおり、わたしはよそ者で、あなたがたの習慣を——あなたがたの貨幣を——知らぬものですから」(Morris, *News* 9)

このあとにつづくディックとのやりとりでゲスト氏はこの世界でお金というものがいっさい消えてしまっていることを知る。もっとあとのほうでは、報酬がないと労働意欲がわかないのではないかというゲストの素朴な疑問に対して、この世界の長老であるハモンド老は「いや、報酬ならちゃんとあります。創造 (creation) という報酬が」(79) と答えている。人びとがものを作ること自体の喜びに促されて暮らしている、相互扶助の社会のなかで、だれ一人としてマモンに仕える者はいない。かといって、キリスト教の神に仕えているとも言えず、強いていえば人類への「信仰」が既存の宗教に取って代わっている。

19世紀イギリスの画家G・F・ワッツ (George Fredric Watts, 1817-1904) の作品でロンドンのテイト・ブリテンが所蔵する絵画作品に《マモン》と題された油彩画がある。ワッツはラファエル前派の影響を受け、当時の象徴主義の代表的な画家の一人であり、モリスのように政治的活動を積極的におこなったわけではないが、この絵のように、近代の産業と商業のもたらした非人間的な影響について絵をとおして批評を加えている。1880年にワッツは「物

質的繁栄がわれわれの本当の神になってしまったが、この目に見える神を崇拜してもわれわれは幸福にはなれないことを知って、われわれは驚いている」(qtd. in Tate) と述べている。こう述べてから4年後にそのいわゆる神、すなわち邪悪な「マモン」を視覚化する仕事に着手したわけである。

ここで「マモン」は残虐かつ醜悪な暴君として描かれている。玉座に座り（背後の装飾は髑髏）、膝元には金入れと思しき袋がある。左側にマモンに拒絶された美しい少女、右下には青年が足蹴にされている。この二人は若さと無垢と美を象徴しているのだろうが、生気がない状態に貶められている。王冠につけられた金貨、それにロバの耳はマモンの無知と愚かさを示しているが、同時にギリシア神話のミダス王のエピソード（ふれるものすべてが黄金になるという願いがかなったのだが、それはじつは呪いだったという寓話）を想起させる。芸術を解さないミダスの耳をアポロはロバの耳に転じたのだった。



G・F・ワッツ《マモン》1884-85年、カンヴァスに油彩。183×106cm。ロンドン、テイト。

次にマモンを扱ったロレンスの詩を見ておこう。「現代の祈り」(Modern Prayer)の一節である。

Almighty Mammon, make me rich!
 Make me rich quickly, with never a hitch
 in my fine prosperity! Kick those in the ditch

who hinder me, Mammon, great son of a bitch! (*Complete Poetry*)

〔全能なるマモンよ、われを金持ちにしたまえ！

滞りなく、ただちに金持ちにしたまえ、

すばらしき富める者へと！ われを妨げる者あらば、

蹴り飛ばし溝に沈めたまえ、偉大なる、コンチクショウのマモンさま！〕

4行すべて「イッチ」という脚韻をそろえて、最後に bitch と留めの一撃を加え、マモン神崇拜への皮肉をいっそう強烈に引き立てているのが印象的だ。ロレンスの思い描くマモンははたしてワッツの描いたような形象であったのかどうか。

オーウェルの1936年の小説『葉蘭をそよがせよ』(*Keep the Aspidistra Flying*)にも「マモン」が出てくる。主人公ゴードン・コムストックが苦吟した詩に、次の文言が含まれている。

The lord of all, the money-god,

Who rules us blood and hand and brain,

Who gives the roof that stops the wind,

And, giving, takes away again; (Orwell 168)

〔なべてのものの主たる金の神、

われらを、血も手も脳も統べるもの、

風をさえぎる屋根を与え、

して、与えておきながら、また取り上げるもの。〕

この小説では“mammon”と言う語自体は使われていないが、このくだりでの“money-god”という語句はこれまで見た「マモン」とほぼ同義と言えるだろう。このハイフンで結ばれた“money-god”は検索したかぎりではこの小説で七箇所出てくる。「金の神」に抗うゴードンの苦闘がこの小説の本筋であり、この点でカーライル、モリス、ロレンスの「マモン」批判の系譜に連なっているといえる。

Ⅲ デザインするポール・モレル

『息子と恋人』の第一部第五章は「ポールが人生に乗り出す」(Paul Launches into Life)²と題されているとおり、主人公ポール・モレルは14歳で就職する。母親から将来どうしたいのか聞かれてもポールにははっきりしたイメージが描けていない。

「何になりたいの？」と母が尋ねた。

彼にはまったく見当もつかなかった。絵を描いていられればよかったが、それは無理なので、そう言えなかった。何もしないのが強い望みになった。しかし、もうどうしても稼がなくてはならない。自分が世の中で金銭的な価値があるとは感じなかったし、どんな仕事でも週給三十や三十五シリングは稼げると知っていたので、いつも、

「何でもいいよ」と答えた。

「それじゃ答えになりません」と母は言った。

だが、正直、それ以外に答えようがなかった。この世のものに関する彼の望みは、どこか家の近くで毎週三十シリングか三十五シリングを地味に稼いで、いずれ父親が死んだら母親と一軒家を持って、絵を描いたり行きたいところへ行ったりしながら、ずっと幸せに暮らすというものだった。(SL 113-14; 邦訳 180-81)

金額が出てきたので注記しておく、世紀転換期のポンドの価値はいまの117倍、一概には言えないが、1ポンドがざっと2万円ほどになり、週給30シリングだと月額にして120シリング、つまり6ポンド=約12万円ということになる。この時期、モレル家は週に30シリングで暮らしているとある。

さて、ポールは求人広告を見るために生協の図書室に赴く、そこで彼は憂鬱な思いにとらわれる。

〔ポールは〕沈んだ気持ちで窓の外を見た。すでに産業主義の慮囚だった。向かいの庭の古い赤堀の上から、大きなひまわりの花がいくつも顔を出して、昼食の材料をかかえて急ぎ足で通って行く女たちをはなやか

に見おろしていた。谷には黄金色の麦が、日を浴びて一面に広がっていた。麦畑に囲まれた二つの炭鉱からは、白い湯気がゆらゆら立ちのぼっていた。彼方の山の中腹のオルダズリーの森が黒々と美しく見えた。ポールの心はすでに沈んでいた。自分は奴隷にされるのだ。美しい故郷の谷にあった彼の自由はすでに消えかけていた。(SL 114-15; 邦訳 182)

産業主義の体制下で「奴隷にされる」という思いで心が沈みながらも、結局ポールは事務職（外科医療器具製造業の工場）に就職する。初任給は週給8シリング。12時間労働で、通勤時間を入れると13時間半ほどもあり、拘束時間が長いのだが、仕事の様子を見ると、他の部署に行って女子職員たちと雑談をする時間もあったりして、「ブラック」会社という感じはない。慣れてくるとポールにとって職場は家庭的で楽しく、男たちが一丸となって働くことに愉悦を覚えるようになる。

それから5年後、第7章では19歳になって、週給は20シリングとなっている。第8章では21歳になっていて、ジョーダン社でだいぶ重要な役割をまかされ、週給も30シリングに近いところまで行っている。その事務職のかたわら、ポールは絵を描き、またデザインにも手を染めている。ポールの家を訪れたミリアムにポールは自分の作品を見せる。

彼女が側へ来て、彼の仕事を覗きこんだ。

「何なの？」

「デザインだ。装飾きれだの刺繍だのに使う」〔中略〕

彼は自分のしたことを何ひとつ彼女に隠しておけなかった。客間に行って、茶色っぽいリネンのひと巻をとってきた。それをそっと広げて床の上に置いた。薔薇の型紙で見事にデザインしたカーテンだった。

「まあ、何てきれいなもの！」彼女が叫んだ。

見事な赤い薔薇と暗緑色の枝を描いた、とても単純でどこか毒のある布地が足下に広がった。〔中略〕

「で、あなた、この布きれどうするの？」彼女は訊いた。

「リバティへ送るんだ、母さんのために作ったんだけど、母さんはお金

のほうがいいと思うから」(SL 240-41; 邦訳 394-96)

このくだりで注目したいのは、ミリアムがそのデザインをどうするのかと聞かれて、「リバティへ送る」(“Send it to Liberty’s”)とポールが答えているところである。ケンブリッジ版のテキストに附されたバロンの注ではこんな説明が付されている。

世紀転換期において、「インダストリアル・アート」、あるいは「アプライド・アート」は小鳥や植物、とりわけ薔薇に基づく様式化された幾何学的なデザインが優勢だった。それはラファエル前派の絵画によってポピュラーになり、バーン＝ジョーンズとウィリアム・モリスによって発展され、オーブリー・ビアズリーの挿絵に影響された。アートマガジンを見ると、壁掛け、カーペット、シルクのタペストリー、ステンシル、刺繍、レースなどのための入賞デザインの写真、技法のアドバイス、ブックリストがいっぱい載っていた。またモリス以後の世代へのビアズリーの退廃的な影響を嘆く記事も多くあった。(SL 547)

以上のように注記して、最後の「退廃的な影響」(decadent influence)という言葉で、「とても単純でどこか毒のある布地」、ミリアムの言う「残酷な感じ」を説明している。

さて、リバティ(ズ)の名前は『息子と恋人』のなかで3か所出てくる。邦訳版の割注で「美術品に強い、ロンドンの有名なデパート」(396)と説明されているとおり、いまでも健在の、ロンドン、リージェント・ストリートにある高級デパートであり、「リバティ・デザイン」の通り名が示すように、テキスタイル・デザインで特に知られる。1875年にアーサー・ラセンビー・リバティ(Arthur Lasenby Liberty, 1843-1917)が創業し、早くから成功を収めた店であり、美術・デザイン史においては、唯美主義、ジャポニズム、また世紀転換期のアール・ヌーヴォーとの関連でよく取り上げられる。関与していたデザイナー、職人などはモリス商会の人脈とも部分的に重なっている。モリス商会では部外者がデザインを持ち込んで採用されるような方式は採っ

ておらず、その一点ではリバティのほうが開かれていたというところは事実を踏まえている。リバティの商品は基本的に商品にはデザイナーの名前を示さず、その点はモリス商会と変わらなかったが、モリスの存命中はモリス商会の製品は（モリスの弟子のデザインであっても）モリスの作品とみなされていたのに対して、リバティではそのような表看板はなかった。ではリバティではプリント・デザインの供給源はどうしていたか。19世紀末から20世紀初頭に同社のシルク部門の部長だったジョン・ルーエリン（John Llewellyn）は1898年に受けたインタビューでその問いにこう答えている。

リバティの店が世間にご提供するのにふさわしい長所を備えているかぎりには、そのデザインがどこから来ようと問題ではありません。私どもはあらゆる方面からデザインを集めているのです。（Qtd. in Adburgham 86）

ポールがデザインをリバティのロンドンの本店——あるいは1885年開業のバーミンガム支店——に持ち込んで、それが受け入れられるというのが無理な設定ではなかったことがこれで分かる。

一方でポールは絵画修業もつづけていて、第10章、23歳の年にノッティンガム城での冬季展覧会に風景画を出品し「一等賞」（first prize）に選ばれ、賞金として20ギニーを得ている（SL 295; 邦訳490-91）。時代はエドワード朝の後半、ポンドの1908～9年頃の価値は108ポンドほどなので、いまの価格で220ポンド、ざっと計算して40万円ぐらいを獲得していることになる。そのあと、第12章で、ポールは24歳。徐々に絵筆で生活の資を稼げるようになっていく。ここでもリバティが出てくる。

彼は徐々に自分の^{アート}芸術で生活の資を稼ぐようになっていた。すでにリバティはさまざまな布地に彼〔ポール〕が描いたデザインをいくつか買い取っていたし、刺繍や祭壇布などのデザインも一、二件の店に売っていた。今は大した金額ではなかったが、成長の可能性があった。製陶会社のデザイナーとも友達になって、彼の技術も学びつつあった。応用芸術が面

白くてたまらなかった (The applied arts interested him very much). 同時に、絵の勉強にもじっくり取り組んでいた. [中略] 自分の作品の価値を固く信じていた. 落ちこんだり、怖じ気づいたり、いろいろあるものの、自分の仕事は信じてつけた. (SL 345; 邦訳 578)

ここでの冒頭の一文「彼は徐々に自分の芸術で生活の資を稼ぐようになっていた」(He was gradually making it possible to earn a livelihood by his art)のなかの“art”とは、文脈からいって「応用芸術」のデザインを指すものであろう. これをモリスの言葉で言うなら「レッサー・アーツ」(lesser arts)を指していると見てよい. この語句は、近代以降の芸術の特殊化、特権化を批判するためにモリスが持ち出してきた批評用語であり、モリスの用法を見渡すと、「装飾芸術」、「民衆芸術」と意味範囲がかなり重なる.

モリスの実践、それに促されてのアーツ・アンド・クラフツ運動と、また部分的にはヴィクトリア朝中期からの政府主導のデザイン改革運動の成果として、装飾デザイナーの社会的認知、および地位の向上が見られた. そうすると、問題含みの言い方をするなら、アーティスト、あるいはデザイナーとしての成功は、収入の増加を伴い、収入のみが階級区分の指標ではないのであっても、階級の階梯を登る手立てになりえる. 絵画で入賞したあと、ポールは燕尾服を着て夜のディナーに度々出席するようになる. そのあとポールは母親とつぎのような会話をするのだった.

「ぼくはね」と、彼は母親に言った. 「金持の中流階級になろうとは思わない. ぼくは普通の人がいちばん好きだ. ぼくも普通の出だから」

「でも他の人にそう言われたら、おまえ、涙をこぼして怒るんじゃないの? どんな紳士にもひけをとらないと思ってるでしょ」

「ぼくはぼくとして」彼は答えた. 「別に階級とか学歴とか物腰のせいじゃない. ぼくはぼくとして紳士に負けないんだ」

「結構ね、でも——それならどうして、普通の出なんて言い出すの? 」

「それは——人の違いは階級じゃなく、その人個人にあるからだ——でも、思想は中流階級にしかないし、普通の人びとの中にしか——生は、

暖かさはない。彼らからは愛や憎しみが伝わってくるだろう」(SL 298; 邦訳 496)

母親の率直な気持ちは息子ポールに中流階級になってもらいたいと願っていて、それはさほど難しくないと彼女は考えている。ポールの^{アート}技芸がその上昇を促進するのではないかと期待している気配である。しかしポールは「普通の人びと」(common people)に寄り添うことにこだわっている。

おわりに

『息子と恋人』のテキストに“mammon”の語は見当たらないが、この小説においても、『チャタレー夫人の恋人』でメラーズが言及している「マモン神」すなわち「拝金主義という名の悪魔」の脅威を、ポール・モレルは強く意識しているように見える。ポールのレッサー・アーツの実践は、自分の進路を模索するうえで選んだひとつの自己実現の手段とも言えるが、晩年のエッセイ「ノッティンガムと炭鉱のある田園地帯」のなかにある、「人間の魂はパンよりももっと現実の美を必要としている」という断言につながるような、「現実の美」を創造し「マモン神」に抗う社会的な身ぶりであると読める。産業主義によって貶められた「普通の人びと」、「醜悪な環境、醜悪な衣服、醜悪な家具、醜悪な家」に追いやられた「普通の人びと」の側に立ち、醜悪さに変えてアクチュアルな美をもたらす一助となること。『息子と恋人』は多方面からアプローチできる作品であると思われるが、本特集の主題に即して言うならば、ポール・モレルの自己形成の歩みをとおして「マモン神への抵抗」が力強く示されている小説だということになるだろう。ポールの「レッサー・アーツ」への傾倒はその抵抗の身ぶりであるように思われる。第12章でミリアムが新しい服をポールに見せて、似合うかどうか聞かれたときに、ポールが答えた際の何気ない台詞のなかにも、そうした姿勢が感じられて、わたしには忘れがたいものである。

よく似合うよ——ものすごく！ [だけど] ほくが君のために服をデザインしてあげられるのに」 (“Suits you—awfully! I could design you a

dress.”) (SL 347; 邦訳 582; 強調は原文)。

*本稿は日本ロレンス協会第47回大会シンポジウム「マモン神に抗って——モリス、ロレンス、オーウェル」(於松山大学樋又キャンパス, 2016年6月11日)での口頭発表の原稿に筆削を加えたものである。同シンポジウムに誘ってくださった武藤浩史氏およびまとめ役の木下誠氏に感謝する。

注

- 1 この点については拙著『ウィリアム・モリスの遺した物——デザイン・社会主義・手しごと・文学』(岩波書店, 2016年)を参照されたい。
- 2 『息子と恋人』の引用は概ね小野寺健・武藤浩史共訳の訳文を利用したが, 論の都合上修正を加えたところもある。以下, 引用のあとに原文(ケンブリッジ版)の当該ページと, 小野寺・武藤訳のページを併記する。

参考文献

- Aldburgham, Alison. *Liberty's: A Biography of a Shop*. 1975. Print. [アリソン・アドバーガム『ドキュメント リバティ百貨店』愛甲健児訳, PARCO 出版局, 1978年]
- Carlyle, Thomas. *Past and Present*. 1843. Ed. Richard D. Altick. New York: New York UP, 1977. Print.
- Lawrence, D. H. *Complete Poetry of D. H. Lawrence*. Hastings: Delphi, 2012. Kindle.
- . “Nottingham and the Mining Countryside.” Ed. James T. Boulton. *Late Essays and Articles*. The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 285-94. Print.
- . *Sons and Lovers*. Ed. Helen Baron and Carl Baron. Cambridge: Cambridge UP, 1992. Print. [D・H・ロレンス『息子と恋人』小野寺健・武藤浩史訳, 筑摩書房, 2016年]

- Morris, William. *News from Nowhere*. 1890. Ed. David Leopold. Oxford: Oxford UP, 2003. Print. [ウィリアム・モリス『ユートピアだより』川端康雄訳, 岩波書店, 2013年]
- . “Why We Celebrate the Commune of Paris.” *Commonweal* 19 March 1887. *Political Writings: Contributions to Justice and Commonweal 1883-1890*. Ed. Nicholas Salmon. Bristol: Thoemmes P, 1994. 232-35. Print.
- Orwell, George. *Keep the Aspidistra Flying*. 1936. London: Penguin, 1989. Print.
- Tate. “George Frederic Watts, ‘Mammon.’” Web. Accessed 5 Feb. 2017.

ゴードン・コムストックの金銭感覚

—— ジョージ・オーウェル『葉蘭をそよがせよ』における拝金主義批判

福西 由実子

「それゆえ、信仰と、希望と、金、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、金である」——これは『葉蘭をそよがせよ』(*Keep the Aspidistra Flying*, 1936) (以下、『葉蘭』と略す)冒頭に提示されるエピグラフである。「コリント信徒への手紙一」第13章1節から13節の「愛」(charity)の大切さを説いた一節をもとに、オーウェルが節中の「愛」の語をすべて「金」(money)に変えて用いたものであり、オーウェル流のブラックユーモアがうかがえる。このエピグラフが象徴するように、この作品のテーマはまさに「金」であり、「金」にまつわる記述が作品の細部にちりばめられている。

本作は出版当時にこうした点がことさら強調され、自伝的作品であるという評価とは別に「本の主題は金に対する妄執であり、そのため芸術品としての均衡が達成される妨げとなってしまう」等の批判がなされたし(Taylor 163)。その後の批評家たちにおいても、1930年代にオーウェルが執筆した小説はどれもジャーナリズムの合間の気晴らし、もしくはその後の『動物農場』(*Animal Farm*, 1945)『1984年』(*Nineteen Eighty-Four*, 1949)の成功への通過点に過ぎないとの見方が一般的であった(Levenson 59)。オーウェル自身も出版に当たって、企業からのクレームを恐れる出版社(ゴランツ書店)の自己検閲により、実在の商品名や広告のコピーなど多数の変更を強いられたこともあり、この作品の出来栄を気に入ってはいなかったという。しかし近年、新たな視点からの本作品の読みなおしが進んでいる。たとえば、クラークは『葉蘭』の中の日常(生活)の表象、とくに飲酒とパブの描写に注目し、後のカルチュラル・スタディーズへとつながる批評的読みを要求する作品であると再評価した。フェルスキは、本作に1930年代のイギリスのロウワーミ

ドルクラスの「恥」の感覚が書き込まれており、彼らの経済状況が日常生活における様々な感触、慣習、感情のレベルに巧みに移し替えられていると読む。また、サザーランドは、自らの病による嗅覚喪失を機に、オーウェルの嗅覚に焦点をあてた「病理学的」伝記を著し、『葉蘭』についても「におい」と関連付けて論じ直している¹。

本論では、こうした研究動向にも目を配りつつ、『葉蘭』の主人公ゴードン・コムストックによる拝金主義批判と、結末におけるその変化の生産的な意味を考察する。その際、作品中に散見する収支の記録に注目するだけでなく、ゴードンの勤務する貸本屋に出入りする様々な階層の客や、店の書架に並ぶ D. H. ロレンスの詩集をはじめとする実に雑多な書籍、作品のモチーフとして繰り返し描写される葉蘭に読み取れる同時代の趣味（テイスト）や文学思潮と関連付けて論じていく。オーウェルがなぜゴードンに、最終的に「金の世界」への回帰——すなわち、詩的ヴィジョンとマスメディア広告との間で折り合いをつけること——を選択させたのか。従来「マモン神への敗北」を示していると批判的に読まれてきたこの結末を肯定的にとらえる一つの手がかりとして、本作をインターモダニズム小説、あるいは郊外モダニズム小説として読みなおす可能性についても言及したい。

1. 『葉蘭』における拝金主義批判

(1) 登場人物それぞれの造形

本作はオーウェルの3作目の長編小説であり、彼自身が1934年10月から36年1月までロンドンのハムステッドにある書店で店員として働いた経験から生まれている。主人公のゴードンは、没落したミドルドルクラス出身で、詩作に没入できる環境をもとめ階級の底辺を経験するために、収入の安定した広告会社を辞め、ロンドン場末の貸本屋の店員となる。会社をやめた理由の根底には、「金の神」に支配された社会への反逆心があったが、やがて生活に困窮し詩作は滞り、彼の独白は、金銭にまつわる文言で埋めつくされていく。恋人の妊娠を機に、ゴードンはこれまで書き溜めた詩の習作の束を下水溝に棄て、決別したはずの広告業界へと戻っていく。小説の結末で彼が新居の窓辺に飾ろうと恋人に提案するのが、ロウワーミドルクラスの象徴ともいうべ

き「葉蘭」である。

登場する主要な人物は3名で、それぞれ実在の人物がモデルであるとされている。主人公ゴードンはオーウェルの分身ともいべき存在であり、コムストック家は「ミドルクラスだが固有の土地を持たない紳士階級」(46)で、「没落紳士の典型である「何一つ変化のない生活」を送って一生を終える」、「子どもを作る意欲さえなくしてしまっている」(48)一族である。ゴードンは(一族が有り金を出し合って送り出した)三流パブリックスクール時代に感じた学友たちに対する金銭的な引け目から、卒業後も金に対しすっかり卑屈になってしまっている。小説における「現在」では30歳の誕生日を迎える年頃で、広告会社をやめて以来2年間、売れない詩を書きながらアルバイトの書店員として貧しく暮らしている。

恋人ローズマリーは、オーウェルの最初の妻アイリーンがモデルであるか、あるいは当時付き合っていた女性たちの複合体とされている。「男女区別ない、大らかな雰囲気」の残る、「貧しい大家族中産階級の末っ子」(142)として育った女性として描かれる。

ゴードンの友人であり支援者／庇護者でもある文芸誌編集長ラヴェルストンのモデルは、実生活でもオーウェルの庇護者であった『アデルフィ』誌の編集長リチャード・リースであるとされる。彼には「生まれながらの品位」(90)があり、ゴードンとパブで不味いビールを飲み交わした後、その足で彼女と一流レストランを訪れワインとステーキを食べ(110)、「リージェントパークに住んで「まともな社会主義者」を気取る」(100)人物として、ゴードンから皮肉の目を向けられている。

(2) 金銭収支にまつわる描写の数々

ゴードンは拝金主義を毛嫌いする一方で、常に所持金を気にしている。「立ち上がると硬貨がズボンのポケットで音を立たた。そこにはいくら入っているか。ごく正確なところまで彼には分かっていた。5ペンス半——2ペンス半と、使いようのない3ペンスの飾り硬貨(Joey)が1枚」(1)。「彼はポケットの中の硬貨をまさぐった。2ペンス半と飾り硬貨だけ——正味2ペンス半だけだ」(5)。所持金2ペンス半と3ペンスの飾り硬貨だけでは、詩作も出来な

いとゴードンは嘆く。彼にとって、なんとか生活を維持する最低額が週2ポンドであるのに対し、ラヴェルストンのそれは年800ポンドである、と記される(103)。ラヴェルストンに対し屈辱感を抱いていて、彼に「食事はすませた」と見栄を張る場面もある(126)。しかし、ラヴェルストンは、そしてゴードン本人も、ゴードンがしょせんは貧乏のまねごとをしているだけであることに気づいている(115, 126)。また、サザーランドが指摘するように、「金」を悪臭と結び付ける、ゴードン(ひいてはオーウェル)に独特の身体感覚も提示される。「金の臭いばかりだ(Money stinks)。いたるところに金の放つ悪臭がする」(13)。「金、金、いつも金だ!」(8)。「金。まだ、全て金だ」(14)。「彼が理解し、時と共にさらに理解を深めたのは、拝金主義が信仰の域まで達してしまったということだった」(46)。「彼は「成功」しないことを究極の目的にってしまった」(48)。「金中心の世界(money-world)から逃げ出すこと——それこそが彼の真の動機だった」(53)。「金の社会に身を置いても、そこには属さないつもりだった」(56)。もはや金に対する絶えることのない強迫観念に囚われている。

2. 同時代の趣味(テイスト)との関連

(1) 貸本屋の風景

次に、この小説中詳細に描かれる、同時代の趣味(テイスト)の数々について、オーウェルの問題意識・身体感覚と絡めて論じていきたい。まず、ゴードンが勤める貸本屋を考察する。書店の書架にはロレンスの初版本やJ. B. プリーストリーの最新作、古典もの、ユーモア小説、詩集、文学書といった種々雑多な書籍がおおよそ800冊並んでいる。その客層は様々で、アッパーミドルクラスもいれば、ロウワーミドルもいる。ゲイと思しき青年もいる。たとえば、「中産階級の中」の出身であるペン夫人は自分がハイブラウであることを誇示するために、ホレス・ウォルポールの小説を借りて行く。彼女は「より下の階級」のウィーヴァー夫人がエセル・M・デルの小説を借りるのをロウブラウであると軽蔑的に見下すが、ゴードンにとってみればどちらの夫人も戯画的な存在であるに過ぎない。この場面では当時の大衆小説の普及状況と、「人びと」の読書趣味(テイスト)とが描かれているが、作品全体につらぬかれて

いるのは、ゴードンが取りくむ「詩」という文学様式が階級（より厳密には、階級と密接に関連する収入の問題と、そこから生じる拝金主義）に抑圧されることに抗おうとする姿勢である。ゴードンが客をにおいと結び付けてその印象を語っている点も興味深い（20-1）。またオーウェルは、『葉蘭』執筆と同じ時期の1936年に発表したエッセイ「書店の思い出」（'Bookshop Memories'）の中で、「人びと」が選ぶ本から、見せかけではなく本当のその人の趣味（テイスト）がわかると述べている（Orwell, 'Bookshop Memories' 512）。

(2) 広告

貸本屋の窓からは、大きな広告看板が見える。ゴードンはこの広告を眺めながら、時代特有の崩落感、退廃感、控告の陰に潜む空虚さや絶望感、そしてその背後に、やがて来る戦争をも予感するのである（22）。ゴードンが勤務していた（そして最終的に復職することになる）広告会社とその社員たちは、次のように描かれる。「ニュー・アルビオン広告会社の面白いところは、考え方が全く現代的だったことである。宣伝——広告——が資本主義の生み出した最悪の詐欺行為であることを全員が十分に承知していた。[...] 社員のほとんどが、情を交えぬアメリカ的合理主義に徹していた——金以外は何物も信用ならないといったタイプの社員ばかりだった」（55）。ギャリントンが論じるように、消費主義を *civilisation* ではなく *apocalypse* と捉えているゴードンは、このような広告の世界を否定する（Garrington 88）。しかし、皮肉なことに彼には非凡なコピー・ライティングの才がある。「ゴードンは初っ端から、コピー・ライティングに素晴らしい才能を発揮した。コピー・ライターになるべくして生まれてきた人間みたいに、見事な文案を作った。[...] 言葉に関する感性はこれまでも持っていたのだが、今回初めて、才能を生かすことが出来たのである」（58）。ギャリントンが指摘するように、作中に登場する広告コピーには、ある種の宗教的・黙示録的な響きがある。いわば言語を金に変えるニュー・アルビオン社への復帰に、当初ゴードンは抗おうとするが、「愛」が全て「金」に変えられている冒頭のエピグラフに、その抵抗の無意味さがすでに予見されているのである。

(3) パブ

ゴードンとラヴェルストーンが訪れるパブの描写も興味深い。ゴードンは断酒とアルコール過剰摂取を行ったり来たりするが、クラークはこのパターンを、ゴードンと社会の変動する関係性を示していると指摘する (Clarke 541)。アルコールを拒絶するゴードンの姿勢は、そのまま金を拒絶する姿と重なるし、彼にとって飲酒とは、「庶民のくらし (lives of common men)」(267) を実感する行為でもある。

ゴードンは、自分の部屋とパブを比べることで、自身のアイデンティティと社会との関係性を探る。彼は安下宿の「寒く孤独な部屋」(28) と、「愛すべきビールの匂い、暖かい部屋と明るい照明、にぎやかなおしゃべり、ビールのこぼれたカウンターで触れ合うグラスの音」(28) がするパブとを比較する。この対比は、のちに彼が金に困りなすすべもなく町で時間をつぶしながら「女っ気のない寒々とした部屋」に渋々と戻ろうとするさい、人でごった返すパブを見かける場面でも繰り返される。「嘎れた声、煙草の煙、ビールの匂い」(79) が流れ出ており、たまらなくなつて窓ガラスの外から中をのぞくと「さも居心地良さそう」(81) なこのパブには、ゴードンが所有しないもの全て——仲間、笑い、女——があることが示される (Clarke 553) ²。

ゴードンにとってのパブは、帰属願望を満たす場所でも資本主義の孤独からの隠れ家でもなく、実際は彼が逃れようとする経済的社会的ナラティブによって構成された空間である。一般的に 1930 年代のパブは内部で 2 つ以上のバーに分けられており、その「仕切り」は文化的であると同時に経済的であり、提供する飲み物も値段も異なっていた (Gorham and Ardizzone 7)。ゴードンは、瓶ビールを出す高級なサルーン・バーに入ることを躊躇するが、「ジョイ硬貨を入れても 4 ペンス半」(79) しか手持ちのないことに思い至り、結局生ビールを出す庶民的なパブリック・バーも諦める (80)。ここでは、皮肉にも彼が拒絶する拜金主義社会の社会的経済的区別が再生産されていることがわかる。「20 人ほどの男たち」が大声で合唱する「ほんとにいい奴なんだから／一緒に居るだけで、とっても楽しくなっちゃう」(79) という歌を聞いても、ゴードンはその友情を実感することなく、かえって落胆と、孤独を深めるばかりである。

一方サザーランドが指摘するように、バブは本文中に何度も悪臭と結び付けられ描き出される (Sutherland 146-50)。ゴードンは、ラヴェルストンをひどい臭いのする低級なバブに誘う。たばこの煙の立ち込めるなか二人はエールを飲むが、ラヴェルストンは、ビールの臭いのこもった空気に辟易し、さらにカウンターの上りに置いてある満杯の痰壺から思わず目をそらし、ブルゴーニュのワインを思い浮かべながらその場を耐える。ゴードンはラヴェルストンに自分の暮らしは週2ポンドの金のために這いつくばる「精神の下水道」であり、食べかすやキャベツなどの生ごみの臭い、ダイニングルームの固まりついたソース瓶、まずい食事、葉蘭の克明な描写とともにそのみじめな実態を綿々と語る。もし君が貧しければ貧しくない人々は君を憎むだろう、悪臭がするから、とゴードンはいう。「リステリンの広告のようなものだ。〈なぜ彼はいつも一人ぼちなのか？ 口臭は人を台無しにします〉。貧困は精神的な口臭なんだよ」(102)³。

(4) 葉蘭

作中、葉蘭を飾るロウワーミドルクラス的生活ぶりが描かれる。川端が『葉蘭をめぐる冒険』において詳細に論じたように、葉蘭はまさにロウワーミドルの象徴である (川端 36-56)。当時イギリス国内で人気を博したドナルド・マッギル (Donald McGill) の漫画絵葉書にも頻繁に描かれた (図版参照)。オーウェルは第二次世界大戦中の危機的な時期に、高等文芸雑誌『ホライゾン』誌に、「低俗な」マッギルの漫画絵葉書についてのエッセイを発表し、民衆文化の価値を説いている⁴。

フェルスキも指摘するように、オーウェルの描くロウワーミドルクラスの人びとは「恥」への恐れに衝き動かされ、ポータブルラジオ、義歯、レースのカーテン、分割払いの家具、ティーポット、マニキュア

“There’s the Vicar at the window sponging his Aspidistra.”
“Horrid old man! He ought to do it in the bathroom!”



セット、生命保険などを手に入れることで、低収入でも見栄えをよくしようと常に励んでいるかのように見える (Felski 35)。この物質文化は実に多様に富んでいて、ここからロウワーミドルのリスpekタビリティ、質素儉約、上昇志向が読み取れる。これらは面白みのない不滅の葉蘭にこそ最も典型的に表れる。葉蘭は、どの窓辺にも飾られている、ロウワーミドルクラスの生活／人生のペースと勝利のシンボルとしてそこここにある。この「実際不死身 (practically immortal)」(29) の植物は、いかなる過酷な環境下でも枯れることなく、しおたれながらも、病みながらも、延々と生き延びるのである。

恋人ローズマリーの妊娠を機に、ゴードンはこれまで書き溜めた詩の習作の束を下水溝に棄て、決別したはずの広告業界へと戻っていく。小説の結末で彼が新居の窓辺に飾ろうとローズマリーに提案するのが、この「葉蘭」である。

彼は通り過ぎる家々を見上げた。知らない通りだった。[...] 窓の半数には「貸間あり」の札が出ており、ほぼすべての窓に葉蘭が見える。典型的な下層中産階級の町だ。[...] 我々の文明は強欲と恐怖にもとづいているが、不思議なことに、庶民の生活においては、強欲はもっと高貴なものに変えられている。あのレースのカーテンの裏で、子どもや安い家具や葉蘭と暮らすロウワーミドルクラスの人びとは、もちろん金の規則に従って生きているが、見事に品位を保っている。[...] 彼らは「体面を重んじて」いる——葉蘭をそよがせているのだ。それに、彼らは生きている。[...] 葉蘭は生命の木だ、と彼はふと思った。(267-68)

このエンディングをどう読むか。一見すると、ゴードンの選択は、詩を棄て「金の世界」へ帰帰するかのようなようであるが、はたしてそうだろうか。ブルームが論じたように、単に皮肉な結末なのだろうか (Bluemel, *Orwell* 69)? このエンディングの意味を考察するひとつのヒントとして、オーウェルをインターモダニストと捉え、『葉蘭』を「インターモダニズム小説」あるいは「郊外モダニズム小説」として読みなおしてみたい。この視点に立って本作を再考すれば、小説の結末の意味と、この作品全体の重要性とが明らかになるは

ずである。

4. 同時代の文学思潮との関連

(1) インターモダニズム小説としての読みの可能性

まず、インターモダニズム小説の定義を整理したい。モダニズム研究が中心であったこれまでの20世紀英文学研究に対する軌道修正の試みとして、ミドルブラウ研究、あるいはインターモダニズム文学研究が英米を中心に盛んになっている⁵。この〈ブラウ (brow)〉というキーワードを、単に〈階級〉に結びつけるのではなく、あえてそれに代わるものとして用い20世紀文化を精読しなおすことによって、新たな趣味(テイスト)による社会階層の流動的な再編の再記述を目指すものである。こうした研究の一環として生まれた代表的著作のひとつに、ブルーメル編著の『インターモダニズム』(*Intermodernism*, 2009)がある。詳細についてはすでに筆者が書評で論じたため省略するが⁶、ここで取り上げられるのは「不当に無視されてきた」不況期、第二次世界大戦期の作家たちとその作品群であり、分析対象となる人物は、オーウェルをはじめ、エリザベス・ボウエン、ストーム・ジェイソン、ウィリアム・エンプソン、J. B. プリーストリー、ハロルド・ヘスロップ、T. H. ホワイト、レベッカ・ウェスト、ジョン・グリアスン、ステラ・ギボンズら多岐にわたる。編者ブルーメルは「人びと」のために何かをなすことを自らの「責任」と考えた彼らをインターモダニストと位置づけ、彼らに共通する特徴を3つに分類する。すなわち①文化的特徴——インターモダニストは典型的に労働者階級文化、および「働く」中産階級文化を表象する。これは彼らが創作以外での収入を確保するため秘書、ジャーナリスト、工場労働者、教師といった定職に就いていることが多く、必然的に労働を作品の題材とすることが多かったためである。②政治的特徴——インターモダニストは政治的に radically eccentric である。彼らが一貫して芸術やイデオロギーに関する、さらにいえば文学様式と性、ジェンダー、人種、階級、帝国との関係性への抑圧的な想定に抗うためである。③文学的特徴——インターモダニストはミドルブラウ、大衆 (mass) といった non-canonical なジャンルに属し、往々にして彼らのナラティブはリアリズムの伝統の枠内となる。これは、彼らが追想

的な小説やラジオドラマを執筆するなかで獲得した、ジャーナリスティックなスキルを表しているともいえる。

また intermodern の “inter” とは、そもそも “between” という意味であり、ブルーメルはこの概念が、単にハイブラウかロウブラウのどちらかではなく、その複合的なものとして、文化的、批評的な架け橋、あるいはボーダーランドとなりうるという。すなわち、相反する様々な事象（例えば elite/common, experimental/popular, urban/rural, masculine/feminine, abstract/realistic, colonial/colonized といった二項対立的要素）の間に挿入 (insert) される、概念あるいは空間となりうる可能性を示唆している。

オーウェルは不況期、第二次世界大戦期に、小説、ルポルタージュ、評論等様々な著作をのこしているが、この時期の彼の生活状況を考慮すると、また、『葉蘭』において「働く中産階級」ゴードンを主人公に据え、広告会社と書店での彼の勤務状況や金銭感覚を、彼の住む下宿やその周辺の情景を、あるいは書店に出入りする様々な階層の客を実にリアリスティックに記した点に留意すると、オーウェルは、たしかに上記の①～③の特徴をそなえたインターモダニストということができよう。

(2) 郊外モダニズム小説としての読みの可能性

ここで、同時代の「インターモダニスト」作家の一例として、上述のステラ・ギボンズ (Stella Gibbons, 1902-89) を挙げてみたい。ハミルによれば、ギボンズが 1930～40 年代に小説で描いたイギリスの郊外は、20 年代にモダニストが描いた都心部とは異なり、大衆的な「郊外のモダニズム」が探求される場所であり、ギボンズはモダニストから退屈な場所として軽蔑された郊外を、可能性に満ちた場所として提示した「インターモダニスト」の一人とされる (Hammill 76-7)。たとえば、『ミス・リンゼイとお父さん』 (*Miss Linsey and Pa*, 1936) では、ロウワーミドルが多く暮らす郊外は理想的な場所として描かれ、逆に都心部は揶揄の対象となる。また、モダニストの美学では称揚される実験性やボヘミアニズムは否定され、逆にモダニストの美学では否定されるハッピー・エンディングが肯定されている (Hammill 79-83)。

ハミルはオーウェルに直接言及していないが、近藤が指摘するように、ロ

ウワーミドルの住む町を肯定的に描き、ハッピー・エンディングで終わる点において本作と『ミス・リンゼイ』は共通する。これら2作品の直接の影響関係を実証的に突き止めるのは難しい。しかし、ギボンズら同時代の「インターモダニスト」の作品にも目を向けることで、『葉蘭』のハッピー・エンディングを「郊外のモダニズム」の文脈に位置付けることは可能であろう（近藤 13-14）。文学思潮に敏感だったオーウェルは、『牧師の娘』（*A Clergyman's Daughter*, 1935）でジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』（*Ulysses*, 1922）のようなモダニズム作品の手法を取り入れたが、3作目の『葉蘭』では、1930年代的な「郊外のモダニズム」の影響を受けハッピー・エンディングを採用したとも考えられるのではないか。

結末の意味——むすびにかえて

この小説の結末において、インターモダニストとしてのオーウェルは、ゴードンに詩とマスメディア広告のどちらか一方のみを選択させているのではなく、あくまで双方の間で折り合いをつけることを選択させているのではないだろうか。ゴードンは、ローズマリーに導かれるようにして郊外型の幸福（結婚して働き、子どもを育てる生活）を「発見」し、葉蘭を窓辺に飾るロウワーミドル的な生活を「品位ある」ものと最終的に認めることのできる、元来抱いていた高尚なモダニズム的な意識を変容させることのできる進歩的な若者であるとはいえないだろうか。また彼は、ハイブラウ的な詩的ヴィジョンを捨てることなく、同時にロウブラウ的なベニー・マガジンは好むという、典型的なミドルブラウ型である⁷。あるいはハッブルが指摘するように、オーウェルはマスメディア広告の方がよほど伝統的な詩よりも social needs を表現していると考えていたのかもしれない（Hubble 213）。いずれにせよ、彼は今後この二つを融合させてうまく広告の仕事が続けていくのだろう。

ゴードンが詩の習作の束を棄て、郊外の幸福を発見し、広告業界に戻っていくという象徴的な結末は、決してパッド・エンドではない。この作品をインターモダニズム小説、あるいは郊外モダニズム小説として読みなおすとき、単にハイブラウかロウブラウのどちらかではなく、その架け橋として、二つの文化を繋ぐ可能性が見えてくる。またこの意味において、1930年代の文化

を論じる上でのこの小説の重要性が示されているともいえよう。

最後に、オーウェル自身と「金」との関係性について補足しておく。奨学金給費生時代に貧しさゆえの弱者としての屈辱を経験したオーウェルは、大英帝国植民地ビルマでの勤務時代に強者の立場をも経験し、罪意識を抱き帰国する。作家として手を付けるもっとも手ごろなテーマが「貧乏」だったのであり、最下層に潜り執筆した『パリ・ロンドン放浪記』(*Down and Out in Paris and London*, 1933)以降の1930年代の彼の作品では、富める者は悪、弱者は善として描かれる。『葉蘭』はまさにこの時期に執筆された作品である。その後のイングランド北部探訪やスペイン内戦参戦等の経験をへて、第二次世界大戦中に『ライオンと一角獣』(*The Lion and the Unicorn*, 1941)の中でオーウェルは「全ての人間の所得は完全に平等でなければならないなどと言ってみても始まらない。[...]通常の格差としては最大限10倍まで、と決めて悪い理由もない。その範囲内であれば、ある程度の平等感も生まれてくる」と述べている(93)。ここで提案されるのは、オーウェルの考えるところの穏当な所得制限であり、社会主義とは言い切れない政策提案(日本の累進課税に似ているともいえる)である。オーウェルは全てが等しく貧しければよい社会であると考えていたわけではない。しかし社会は是正したい。この案を補強するのがオーウェルにとって「金」となったのではないだろうか。この意味で、『葉蘭』は『ライオンと一角獣』にも見られる、後年のオーウェル独自のゆるやかな民主社会主義思想へと至る成長過程と位置付けることができよう。

本稿は日本ロレンス協会第47回大会シンポジウム「マモン神に抗って—モリス、ロレンス、オーウェル」(於松山大学樋又キャンパス, 2016年6月11日)での口頭発表の原稿に加筆・修正を加えたものである。

注

- 1 Ben Clarke, "Beer and Cigarettes and a Girl to Flirt with': Orwell, Drinking and the Everyday," *English Studies* Vol. 96 No. 5 (2015): 541-561. Rita Felski,

“Nothing to Declare: Identity, Shame, and the Lower Middle Class.” *PMLA: Publications of the Modern Language Association of America* Vol.115 No.1 (Jan 2000): 33-45. John Sutherland, *Orwell’s Nose: A Pathological Biography* (London: Reaktion Books, 2016).

- 2 『ウィガン波止場への道』 (*The Road to Wigan Pier*, 1937) における、「窓ガラスの向こう側の」炭鉱夫の家庭の描写に重なる場面である。
- 3 ラヴェルストーンは「下層階級の話はしないで。私嫌いよ。あの人たち臭うもの」との恋人ハーマイオニーの言葉に対し、「下層階級 (lower classes)」ではなく「労働者階級」と呼ぶよう穏やかに (暗黙のうちに臭い点に同意しながらも) たしなめるが、「でもにおいは同じよ」と返される (109)。オーウェルは『葉蘭』において「金」をにおいと結び付けて提示したが、自身の問題意識を身体感覚で把握し提起するこの独特の感性は『ウィガン波止場への道』における労働者、『カタロニア讃歌』におけるスペイン民兵の表象においても健在で、戦間期から戦中にかけて、大いに議論を巻き起こすこととなった。
- 4 Orwell, ‘The Art of Donald McGill’ (1941)。マッジは、50年間、週に10枚絵葉書を制作し、実に二万点以上の作品を残したとされる。
- 5 Hubble の定義によれば、インターモダニズムとは、1930-40年代に起こった、実際に存在するモダニズム (actually existing modernism, 戦後にキャンオン化されたモダニズムとは異なる) とミドルブラウ文化との相互作用をあらわすという (Hubble 212)。
- 6 福西由実子「Kristin Bluemel, ed., *Intermodernism: Literary Culture in Mid-Twentieth-Century Britain* (Edinburgh UP, 2009) 『ヴァージニア・ウルフ研究』第30号 (ヴァージニア・ウルフ協会, 2013年10月) 79-84。
- 7 あるいは自ら率先しマス・オブザーヴェイション運動 (Mass-Observation, 以下 M-O) へのボランティア協力に名乗りを上げた、自身の「書く」行為の意義と自立性を十分に理解していたマス・オブザーヴァー型ともいえる。M-Oとは、1937年に始められた大衆調査である。その前身 Popular Poetry は、M-O 創立メンバーの一人、チャールズ・マッジが、友人ウィリアム・エンブソンとともに1936年秋に始めた運動で、ボランティアのスタッフが予め与えられたイメージのカードを用いて詩作をし、また毎月12日に日記をつけて提

出した(1937年2月～38年1月)。ボランティアの中心をなしたのはロウワーミドルクラスの「進歩主義的な」若者で、芸術と科学を融合させ国民の実態を把握しようとする運動の趣旨に賛同した者たちであった。

参考文献

- Bluemel, Kristin. *George Orwell and the Radical Eccentrics: Intermodernism in Literary London*. London: Palgrave Macmillan, 2004.
- . Ed. *Intermodernism: Literary Culture in Mid-Twentieth-Century Britain*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2009.
- Clarke, Ben. “Beer and Cigarettes and a Girl to Flirt with: Orwell, Drinking and the Everyday.” *English Studies* Vol. 96 No.5 (2015): 541-61.
- Felski, Rita. “Nothing to Declare: Identity, Shame, and the Lower Middle Class.” *PMLA: Publications of the Modern Language Association of America* Vol. 115 No.1 (Jan 2000): 33-45.
- Garrington, Abbie. “Counter Discourse: Advertising Technologies and Textual Impact.” *The Space Between: Literature and Culture 1914-1945* Vol. 4 No. 1 (January 2008): 83-99.
- Gorham, Maurice and Edward Ardizzone. *The Local*. London: Cassel, 1939.
- Hammill, Faye. “Stella Gibbons, Ex-Centricity and the Suburb.” *Intermodernism: Literary Culture in Mid-Twentieth-Century Britain*. Ed. Kristin Bluemel. Edinburgh: Edinburgh UP, 2009. 75-92.
- Hubble, Nick. “Imagism, Realism, Surrealism: Middlebrow Transformations in the Mass-Observation Project.” *Middlebrow Literary Cultures: The Battle of Brows, 1920-1960*. Ed. Erica Brown and Mary Grover. New York: Palgrave Macmillan, 2012. 202-17.
- Levenson, Michael. “The Fictional Realist: Novels of the 1930s.” *The Cambridge Companion to George Orwell*. Ed. John Rodden. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Orwell, George. *Keep the Aspidistra Flying*. 1936. London: Secker & Warburg,

1997. Vol. 4 of *The Complete Works of George Orwell*. Ed. Peter Davison. 20 vols. 1986-1998.
- . ‘Bookshop Memories’. 1936. London: Secker & Warburg, 1997. Vol. 10 of *The Complete Works of George Orwell*. Ed. Peter Davison. 20 vols. 1986-1998.
- . ‘The Lion and the Unicorn: Socialism and the English Genius’. 1941. London: Secker & Warburg, 1997. Vol. 12 of *The Complete Works of George Orwell*. Ed. Peter Davison. 20 vols. 1986-1998.
- Sutherland, John. *Orwell’s Nose: A Pathological Biography*. London: Reaktion Books, 2016.
- Taylor, D. J. *Orwell: The Life*. London: Vintage, 2004.
- 川端康雄『葉蘭をめぐる冒険』（みすず書房, 2013年）
- 近藤直樹「『葉蘭をそよがせよ』のハッピー・エンディングについて」『オーウェル研究』, 第35号（日本オーウェル協会, 2016年4月）12-14.
- 福西由実子「Kristin Bluemel, ed., *Intermodernism: Literary Culture in Mid-Twentieth-Century Britain* (Edinburgh UP, 2009)」『ヴァージニア・ウルフ研究』第30号（ヴァージニア・ウルフ協会, 2013年10月）79-84.
- . 「インターモダニズム小説としての『葉蘭をそよがせよ』」『オーウェル研究』, 第35号（日本オーウェル協会, 2016年4月）5-8.

研究ノート

ロレンスの「眠り姫」物語 ——「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」の場合

横山 三鶴

はじめに

ロレンスの作品の中には、「眠り姫」の物語をモチーフとして展開される様々な物語がある。「眠り姫」の物語とってすぐに連想されるのは、ペローの「眠れる森の美女」とグリムの「いばら姫」であるが、物語の起源は、バジールの『ペントローネ』の中の「日と月のタリア」、中世フランスの『ペルスフォレ』の物語、北欧神話、ギリシア神話と遡ることができ、その眠りと目覚めには様々な読みが重ねられてきた。ペローとグリムでは、プロットは、よく知られているように、仙女の予言により呪いをかけられ15歳のときに永遠の眠りについた王女を他の国の王子が救いにやってくる、という点で概ね共通している。王子がキスをした瞬間に王女が目覚めるというのは、グリムの「いばら姫」の方である。このプロットで注目したいのは、一つは、救いに来てくれる王子を王女が眠りの状態で待ち続けているということ、そしてもう一つは、キス、つまりからだとかからだの接触が目覚めのきっかけであり、目覚めた瞬間から相手を受け入れるほどのインパクトを持つということである。

この昔話を深層心理という観点から分析すると、河合隼雄によれば、15歳という年齢は少女が何らかの「つむ（糸巻き棒）の一突き」的な経験、たとえば初潮を迎えたり異性を意識したりといった経験をする時期であることを意味し、その後の眠りは、少女が女性として開花するまでの準備期間を象徴している(129)。ペローの話に付け加えられている「待つことで失うものなし」という教訓は、100年の眠りという象徴的な時間の意味を踏まえて、人生には

そのような眠りの時間が必要であることを示唆している。だからこそ、目覚めた瞬間に相手を受け入れることができるのだ。

さらに昔話には様々な解釈や説明があり、たとえばフェッチャーによれば、この100年の眠りは、娘の処女喪失に対する恐怖、娘が相応しい相手に会おうまでは、処女のままでいてほしい、15歳の若さと美しさを失わないでほしいという親の願望を反映、誇張したものだという(274)。あらゆる危険から娘を遠ざける教育は、結果的に娘の自然な成長を抑圧することになっていたことに両親は気付いていない。また、ベッテルハイムによれば、この思春期特有の静止した「眠り」のような時間は、人生の大きな転機を乗り越えて成長するには、活動的な時期と静止した時期、つまり自己の内面に目を向ける時期の両方が必要だということを示唆しているとし、同時に、美しい乙女の長い眠りには、「もし我々が、変化し、発達することを望まなければ、それは、死のような眠りにおちているのと変わらない。[……]そこには、孤立した自己愛しかない」(305)という意味があることも指摘する。人は、他者と繋がりを持つことで目覚め、人生を眠ったまま過ごす危険から免れる。つまり、目覚めは「他者との調和」を象徴しているのである。

「眠り」と「目覚め」の奇跡的瞬间、結婚という急速な展開を特徴とするこのモチーフを、ロレンスは娘を主人公としたいくつもの短編に用いている。それは、これまでも Harry T. Moore を始め、Kate Millett, Janice Hubbard Harris, Ronald Granofsky などすでに多くの批評家たちによって言及されてきた。では、「眠り姫」をキーワードに、作品を拾ってみるとどうなるだろうか。未婚で男性経験を持たない娘に限定するなら、初期においては「牧師の娘たち」(“The Daughters of the Vicar” 1911)、中期の「馬仲買の娘」(“The Horse-Dealer’s Daughter” 1916)、「ヘイドリアン」(“Hadrian” 1919)、後期の「プリンセス」(“The Princess” 1924)、『処女とジプシー』(*The Virgin and the Gipsy* 1926)へと繋がる一連のロレンス流「眠り姫」物語の系譜が、一つの軸としてできあがる。

ロレンスの「眠り姫」物語には、それぞれに閉鎖的な「家」という空間が設定され、そこで娘は、本来の生き生きとした生を満喫できていなかったり、あるいは死の願望を抱えていたり、といった象徴的な眠りの状態にある。そ

こへ、王子の役目を果たすべく男性が登場し、「眠り姫」物語の口づけに相当する何らかのからだとからだの接触があり、それがきっかけとなり娘は目覚める。古い自己を捨て新しい生に目覚めるとというのが、どの作品にも共通したプロットである。ただ、「プリンセス」では、ロレンスはあえて眠り姫物語を反転させ、悲劇的結末を迎える物語にしている¹。

しかし、昔話に様々な解釈が可能であるように、ロレンスも「眠り姫」のモチーフを短編の特徴を生かして様々な展開したといえる。さらに、長編と異なり、短編という限られた空間においては、ことばより視線、からだとからだの接触といった、感覚的、直感的要素が、他者の存在をよりいっそう際立たせるのに効果的である。しかも、インパクトは、その他者が、自分と異質な存在であればあるほど、より大きいものになる。そこで、まず一連の「眠り姫」物語の系譜の中で、中期の「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」がどのように位置づけられるかについて考察したい。

I. ロレンスの（中）短編における「眠り姫」たち

「眠り姫」物語の主人公は、言うまでもなく、眠り姫と王子である。「牧師の娘たち」では、まず対照的な結婚をする姉妹が描かれる。炭鉱町の牧師館で暮らすリンドリー家の姉妹は、窮屈で周囲からも孤立した牧師館での生活に不満を感じている。長女メアリーは、家系も教養も財産も申し分のない、しかし精神的にも肉体的にもかなり歪な牧師と結婚するが、次女のルイーザは、教会の仕事で知り合った、自然で率直なある炭坑夫の家族に惹かれていく。プロット上は、炭坑夫のアルフレッドが牧師の娘ルイーザを牧師館から救い出し、新しい世界カナダに連れて行くというものだが、この作品では、娘を目覚めさせたはずの王子、アルフレッドの存在感が薄い。日常から不満を強く意識していたルイーザには、眠り姫のように眠って待つという象徴的な「眠り」の要素も少ない。

ルイーザは、階級差のある男、生命力を感じさせる鍛えられた肉体に触れたことで、自分の内なる欲求に目覚めた。しかし、ルイーザの潜在的な欲求がアルフレッドの肉体に触れるというきっかけを通して目覚めたにすぎない。アルフレッドが何か行動を起こしたわけではなく、変化はあくまでルイーザ

の感覚、内なる感情の中で起こったできごととして描かれる。ロレンスの「眠り姫」物語は、王子が王女を目覚めさせるというお決まりのパターンではないようだ。

「馬仲買の娘」は、より「眠り姫」的な物語である。母親を亡くして家族のために母親の役目をしていた娘メイベルは、父親が亡くなり馬仲買という商売も成り立たなくなると、兄たちからも見捨てられて独りになる。しかし、彼女には、「自分の人生は自分で決める」(EME 143)という強い意思があったので、迷うことなく、亡き母の世界へ行こうと命を断とうとする。彼女にとっては母のいる死の世界の方がはるかに現実味があり、母の代わりに父や兄の世話をしていた日々は、まさに「眠り」の人生だったからだ。池に身を沈めようとするメイベルの姿を見かけたのは、炭坑夫や鉄鋼夫の住む町で働く若い医師であった。彼は自分が泳げないことも忘れて池に入り、娘を救い蘇生させる。そして、死の淵から目覚めた彼女に、奇跡的な瞬間が訪れる。

“Who undressed me?” she asked, her eyes resting full and inevitable on his face.

“I did,” he replied, “to bring you round.”

For some moments she sat and gazed at him awfully, her lips parted.

“Do you love me then?” she asked.

He only stood and stared at her fascinated. His soul seemed to melt.

She shuffled forward on her knees, and put her arms round him, round his legs, as he stood there, pressing her breasts against his knees and thighs against her, drawing him to her face, her throat, as she looked up at him with flaring, humble eyes of transfiguration, triumphant in first possession. (EME 148)

この瞬間はあまりにも唐突で不自然な印象を与えるのだが、先に述べた「眠り姫」のプロットを象徴的に描いたと考えれば、唐突であるがゆえに、よりインパクトを与える場面となっている。この作品では、医師の方に階級を意識した葛藤が見られるものの、アルフレッドのような優柔不断さはなく、

ファーガソン自身も短い時間の経過の中で感情が高まり、少なくともメイベルを受け入れようとしている。この作品は第一次世界大戦時に執筆されたこともあり、娘の象徴的な死を経て、自意識や社会的自己を捨てた上での男女の「再生」が重要なテーマとなっているといえる。

そして、その3年後の1919年、しばらく執筆活動を停止していたロレンスが、ピンカーに短編ならアメリカで買い手が見つかるかもしれないと言われて執筆した作品の一つが、「ヘイドリアン」である。「ヘイドリアン」の舞台は、周囲に堀を巡らした四角いレンガ造りの、かつて製陶所を営んでいたロックリー家の邸宅である。この作品は『イングランド、わがイングランドよ』(*England, My England and Other Stories* 1922) に収録される際に「ぼくに触れたのはあなた」("You Touched Me") と改題された。ヘイドリアンという若者が、婚期を逃した10歳年上のマティルダを、外の世界から隔離されているかのように病気の父と妹と暮らす家から連れ出す、という物語である。この作品の場合、半ば眠った状態のマティルダが、父が寝ていると思っていた寝室に誤って入りヘイドリアンの顔に触れるという、まさにヘイドリアンにしてみれば「触れたのはあなた」の状況が、マティルダの立場を一変させる。

“Are you asleep?” she said softly, advancing to the side of the bed.

“Are you asleep?” she repeated gently, as she stood at the side of the bed. And she reached her hand in the darkness to touch his forehead. Delicately, her fingers met the nose and the eyebrows, she laid her fine, delicate hand on his brow. It seemed fresh and smooth — very fresh and smooth. A sort of surprise stirred her, in her entranced state. But it could not waken her. Gently, she leaned over the bed and stirred her fingers over the low-growing hair on his brow.

“Can’t you sleep to-night?” she said. (*EME* 99)

それに答えるヘイドリアンの声を聞いて初めて、彼女は自分のトランス状態から目覚めるのだ。「馬仲買の娘」と同様、目覚めたのは娘だけではない。メイベルを目覚めさせたファーガソンが意思に反して目覚めてしまったように、

この場面ではっきり目覚めを意識したのは、むしろ、ヘイドリアンの方である。マティルダは決して触れられたわけではないのだ。では、この物語は「眠り姫」物語の触れる側と触れられる側を逆転させた物語なのだろうか。娘を目覚めさせる王子ではないとすれば、ヘイドリアンはいったい何者なのか。

ヘイドリアンは、ロックリー氏が女ばかりの生活に辟易して養育院から迎えた養子である。そのとき彼は6歳で、何の取り柄もない少年であった。マティルダは彼を少しは紳士らしく教育したいと思うのだが、彼は抵抗する。15歳になると突然カナダに渡り、電機工場で働き、第一次世界大戦が始まると入隊し、21歳のときに「活力にあふれた」「茶色い肌」(EME 95)の若者となって、ひょっこり戻ってくるのである。孤児を養子にするという点、ロックリー氏のヘイドリアンに対する偏愛という点でも、この物語は、E・ブロンテの『嵐が丘』と似ている。そして、ヘイドリアンは、ヒースクリフと同様、侵入者であり、父親の愛情の略奪者であり、娘たちにとっては遺産の問題も含めて次第に恐るべき存在となっていくのである。それが、マティルダ側の過失による接触で、状況は一転するというわけだ。二人の結婚は父親の策略と娘に対する復讐的な要素もあり、かなり捻りの利いた物語となるのだが、ヘイドリアンはマティルダを、ロックリー家の塀の外、カナダへ連れ出そうとする。

さて、Rudermanは、*D. H. Lawrence and the Devouring Mother* (1984)において、この作品は「Magna Materに対するロレンスの敵意」(81)と貪る母性を持つ「上流階級の妻への復讐の試み」(82)を示すものであると解釈していた。*Race and Identity in D. H. Lawrence: Indians, Gypsies, and Jews* (2015)においては、この作品をロレンスとジプシーの関連を論じる中で取り上げ、この古代ローマ皇帝の名前ハドリアヌスを持つ若者を、外部からの侵入者でありながら、「真のインサイダーであり、相続者」と位置付けている。ローマ皇帝の名前はジプシーの自称である「ロマ (Romany)」を十分に連想させるからである。『嵐が丘』との類似性からも、ヘイドリアンは、「ジプシー」もしくは、「ジプシネス (Gypsiness)」を持つ人物として創作されている、と指摘する(128-29)。娘をジプシー的な男性によって、家の外の世界へ連れ出させるというプロットと、ヘイドリアンの持つジプシー的要素は、間違いなくその後のロレンスの作品にも影響を与えている。それは、ロレンスが後期

の最後の段階で、中編小説『処女とジプシー』という作品を執筆したことにも関連している。

『処女とジプシー』の主人公イヴェットは、レディ・オブ・シャロットのように、誰かが「気の利いた歌を口ずさみながら川辺をやってくる」(VG 35)のを想像して、窓から外を見る。「牧師の娘たち」同様、この作品に登場する姉妹も、牧師館独特の閉塞感の中に閉じ込められた状態にあり、この姉妹はスイスのローザンヌにある女学校に行っていたにもかかわらず、帰国後は牧師館とその周辺のコミュニティーに押し込められるのだ。というわけで、彼女たちにとっては牧師館の家の空気がより一層重苦しく感じられる。現実的な性格を持つ姉のルシールとは対照的に、イヴェットはいつも「催眠術にかけられているような」(VG 11)状況で何かが起こるのを待つことになる。そのような生活の中で、彼女はある日ドライブに出かけて出会ったジプシーの男に憧れ、彼こそ自分の中にいる別の自分に気づかせてくれる存在であると信じて、彼に救われる(触れられる)ときを待っている。「古き者は去り新しき者が救われる」(VG 77)のを象徴するかのような洪水が起こり、イヴェットがジプシーに命を救われると同時に、新しい自分に目覚めたところで物語は終わっている。一方、ジプシーは役割を終えたかのように去っていくのだが、生きる力を強く確信したイヴェットは、この一連の「眠り姫」物語の最後の眠り姫なのである。

II. 静止した時間と母親の不在

「眠り姫」物語の系譜の中で、「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」はどのように位置づけることができるのだろうか。この二つの物語は、それぞれの家の状況が述べられるところから始まる。「馬仲買の娘」の冒頭の場面は、父が亡くなり一家が解散する事態となり、兄弟が今後の身の振り方を話し合うという家族会議の場面である。メイベルに今後の身の振り方を尋ねる兄のジョーは、彼女の返事を聞くつもりもない。彼らの家は、馬仲買を営んでいて、かつて厩舎は活気に溢れていたが、今は時代の流れで、荷馬車を引く最後の馬たちが運動に出るところを見送ったところだ。一方、「ヘイドリアン」は、父親ロックリー氏が営んでいた古ぼけた製陶所の邸宅の描写で始まる。その製

陶所も今は閉鎖されていて、かつてのような賑わい、たくましい馬が荷馬車を引く光景が見られることもなく、そこで働く若い労働者たちの声が聞こえることもなく、静かである。そしてロックリー氏は、瀕死の状態なのだ。

どちらの舞台も、時代に取り残され、時間が止まった状態である。そのような静止した時間の中で、娘たちは外の世界と関わりを持たずに、ひっそりと暮らしている。ここで二つの作品が執筆された時期を振り返ってみる。「馬仲買の娘」は1916年、コーンウォール滞在中という、ロレンス自身が非常に閉塞された状況の中で執筆された。その後「ヘイドリアン」を執筆するまでの期間は、コーンウォールを退去させられ、屈辱的な経験もし、住居も定まらず、体調も崩し、彼の魂はますます周囲から孤立する状況に追い込まれていた。この時期は彼にとってイングランドそのものが閉ざされた空間であり、執筆の時期は、ロレンスがこの国から脱出したいと願っていた時期と重なっている。

そして、どちらの物語にも母親は登場しない。しかし「馬仲買の娘」のメイベルにとって、母親は亡くなっているがゆえに重要な存在である。彼女は母親と親密な関係にあったようで、母親の死後、父親や兄弟の面倒を見て生きてはいたが、彼女の中では時間は静止していて、母親だけを心の拠り所に日々の生活を送っていた。母親が眠る墓地に行くと、彼女は亡き母に近づけるといふ思いで満たされ、一種のエクスタシーすら感じるのだ。

She felt in immediate contact with the world of her mother. She took minute pains, went through the work in a state bordering on pure happiness, as if in performing this task she came into a subtle, intimate connection with her mother. For the life she followed here in the world was far less real than the world of death she inherited from her mother. (EME 143)

彼女にとって母親は死のイメージしかなく、母親は死をもって娘を呪縛している。悪い仙女が姫に呪いをかけたように。

「いばら姫」の話に戻って仙女が象徴する意味を考えると、良い仙女と悪い

仙女は、母親の良い面とネガティブな面を象徴しているという解釈も可能である。娘の眠りは母の呪いという説である。物語の王妃は、実は娘を産んだだけで何もしていない無能な母親である。娘の性的な目覚めを恐れる父親だけが、娘をあらゆる危険から遠ざけようと、城に閉じ込め、様々な画策をするのである。この読みは「ヘイドリアン」の物語の父親に当てはめることができる。しかも、この父親は、娘を城に閉じ込めてはいるものの、他者を連れ込んできている。ヘイドリアンは他者としてやってきたのではなく、父親によって連れてこられたアウトサイダーなのだ。

「ヘイドリアン」にも母親は登場しない。「母親はすでに亡くなっていた」(EME 93)とあまりにも簡単に片付けられている。母親を知らない娘はどうなるか。四人の姉妹のうち、上の二人は順に家を出ているが、マティルダの場合、父親が老いていくにつれ、家に残って面倒を見ているうちに、マティルダ自身が母親のようになってしまっていた。間違いとはいえ、ヘイドリアンの顔を愛撫する場面は、母親が子どもを、あるいは、娘が恋人を愛撫するようである。そして、それが皮肉にも母親を知らないヘイドリアンを目覚めさせてしまうのだ。

ロックリー氏が孤児院からヘイドリアンを連れて来たとき、マティルダは10歳年下の彼を紳士に仕立て上げようと、母親のような態度で接していた。実際、ヘイドリアンが彼女と結婚したいと申し出たとき、「わたしはあなたの母親ぐらいの歳なのよ。ある意味、わたしはあなたの母親だった」(EME 106)と母親のような立場を理由に抵抗しているのである。自分のことを母親のような存在であると主張するマティルダは、明らかに自分の女性としての人生や性的な欲望を自ら抑圧しているといえる。ロレンスはこの二つの物語では、あえて死というかたちでその存在を消すことで、母親の持つネガティブな側面を娘に反映させている。母親の不在は、娘のアイデンティティに関わる問題なのだ。

『処女とジプシー』でも母親は不在である。イヴェットの母親は、フリーダがそうであったように、娘たちを残して、一文無しの男と駆け落ちをしている。しかし、母親のネガティブな面を象徴しているのは、彼女を守っているつもりでのセイウェル夫人や伯母の方であり、娘を捨てて家を出た母親の方はポジ

タイプに捉えられている。ロレンスにとって危険な母性とは「貪る母性」で、それは男性にとって脅威である。そのような母性がある以上、その母親は、娘にとっても同様に破壊的である。『処女とジブシー』から見えてくるのは、この作品だけは、娘は母親のポジティブな要素を受け継いでいて、それは、母性を捨てた母親の生き方に示される、モラル、階級、人種といったそれぞれの「境界を超えることのできる能力・勇気」なのである。

男性にとって「貪る母」がいかに脅威であるか、ロレンスがフリーダとの関係においてそのことを意識し始めたのは、ちょうど「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」の間の時期にあたる。

First, I send you the Jung book, borrowed from Kot. in the midst of his reading it. Ask Jack not to keep it long, will you, as I feel I ought to send it back. — Beware of it — this Mother-incest idea can become an obsession. But it seems to me there is this much truth in it: that at certain periods the man has a desire and a tendency to return unto the woman, make her his goal and end, find his justification in her. In this way he casts himself as it were into her womb, and she, the Magna Mater, receives him with gratification. This is a kind of incest. It seems to me it is what Jack does to you, and what repels and fascinates you. I have done it, and now struggle all my might to get out. In a way, Frieda is the devouring mother. — It is awfully hard, once the sex relation has gone this way, to recover. If we don't recover, we die².

Ruderman は「ヘイドリアン」を「Magna Mater に対する復讐の試み」と解釈したのだが、マティルダが望まない結婚を強いられたとしたら、その試みは成功したといえるであろう。物語の結末は、一見、そのようにも見える。しかし、マティルダがヘイドリアンとの結婚を本当に渋々受け入れたのがか問題になってくる。マティルダは確かに貪る母性的要素を持ってはいるが、果たして「娘」として生きる可能性は持っていなかったのだろうか。母親を知らない、つまり、ポジティブであれ、ネガティブであれ、女性としての生

き方の指針となるものを持たない娘は、献身的に母親の役割を務めたからといって復讐されなければならないのか。女性として人を愛することはできないのだろうか。Harrisは、マティルダは「誰にも触れられていない」し「目覚めたわけでもない」とし、この作品を従来のロマンティックなラブストーリーとしての「眠り姫」物語の伝統を崩す試みであると位置づけたが(151-52)、果たしてマティルダは眠り姫にはなれないのだろうか。

III. 眠り姫の目覚めの条件

「眠り姫」の物語で期待されるのは、目覚めた後に訪れる幸福、結婚という結末である。しかし、ロレンスの一連の「眠り姫」の物語の結末は曖昧である。目覚めるのは必ずしも娘だけではないし、それぞれに目覚めの意味があり、自己の境界、限界を超えるという意味合いが強調される。人間関係において、自分の中の境界、限界を超えるということは、すなわち、他者をどう受け入れるかということでもある。

「馬仲買の娘」の場合、メイベルにとっての境界は「死」、彼女はまさに生と死の境界に立っていたので、自分を生へと引き戻してくれたファーガソンを、愛と呼べるのかどうかは別として、すんなりと受け入れることができた。彼女には、自分の運命は自分で決めるという強みもあったからだ。境界を超える葛藤は、むしろファーガソンに託される。ファーガソンはというと、メイベルを蘇生させたのは、あくまでも医師としてなので、命を助けたからといって個人的な感情を持つわけではなく、メイベルを愛したいと思ったことも、愛するつもりもなかった。では、彼が超えなければならない境界は何だったのか。メイベルに「愛してくださるのね」と言われて、まず彼が感じたのは、医師としての名誉の冒涇ということだ。この事実が皆に知られることに対する苦痛である。しかし、ファーガソンには、医師というプライドを、労働者階級の人たちとの境界を超える能力はあった。

Nothing but work, drudgery, constant hastening from dwelling to dwelling among the colliers and the iron-workers. It wore him out, but at the same time he had a craving for it. It was a stimulant to him to be

in the homes of the working people, moving, as it were, through the innermost body of their life. His nerves were excited and gratified. He could come so near, into the very lives of the rough, inarticulate, powerfully emotional men and women. He grumbled, he said he hated the hellish hole. But as a matter of fact it excited him, the contact with the rough, strongly-feeling people was a stimulant applied direct to his nerves. (*EME* 144)

彼はそのような関係を求める潜在的な願望を持っていたのだ。目覚めるということが、それぞれが自分の中の境界を超えるということの意味するのであるならば、物語は必ずしもロマンティックな展開になる必要はない。

「ヘイドリアン」の場合は、物語は寓話というより、世俗的な展開をみせる。ヘイドリアンはもともと孤児であり、ロックリー家にとってはアウトサイダーである。ヘイドリアンは、ロックリー家に養子に来てからも、この家に染まらないように抵抗を続けてきた。用心深く、慣れることはなく、マティルダによって紳士として育てられることを拒み、学校で教育されることにも抵抗し、押しつけがましい親切に対しては感謝することもせず、カナダへ渡る。彼は、永遠のアウトサイダーであるべきだったし、実際そのつもりだったのだ。マティルダに触られるまでは、マティルダとの結婚を思いつくまでは、金が欲しいとも思っていなかった。

マティルダにとって、ヘイドリアンを受け入れることは「馬仲買の娘」のファーガソン以上に苦痛を伴うものである。彼女にとってのヘイドリアンは、いつまでも、人を小馬鹿にしたような、粗野で下品な青二才のはずであった。それだけに、ヘイドリアンに触れたことは衝撃的な過ちであった。しかし、結婚を持ちかけられたとき、彼女はプライドが傷つけられたと憤り、不名誉で不快なことだと父親に訴えはするが、ヘイドリアンに直接断るわけでもなく、外に逃げるわけでもなく、ひたすら家の中で彼を避けようとするだけである。彼女の抵抗は、あくまで、自分はヘイドリアンにとって母親のようなものなのか、不作法なことなのか、彼女自身のプライドのレベルに終始している。ヘイドリアンに対しても「好きなのか、好きでないのか」という問い

かけには、一切答えないのだ。肯定はしないが、否定もしない。父親の悪意ともとれる理不尽な欲求に対しても、エイミーのようにはっきり反論もしないのだ。

読者は、マティルダが無意識に父親を愛し、同時にヘイドリアンを意識していたことに容易に気づくことができる。ヘイドリアンが予定より早く戻ってきたとき、不意を突かれたことでマティルダは動揺し、それを自分に不利だと悔しがっている。そして次に、いかに自分を印象づけるかを考えるのだ。

Matilda went upstairs to change. She had thought it all out how she would receive Hadrian, and impress him. And he had caught her with her head tied up in a duster, and her thin arms in a basin of lather. But she did not care. She now dressed herself most scrupulously, carefully folded her long, beautiful, blonde hair, touched her pallor with a little rouge, and put her long string of exquisite crystal beads over her soft green dress. Now she looked elegant, like a heroine in a magazine illustration and almost as unreal. (*EME* 96-97)

そして、庭をぶらぶらしている軍服姿のヘイドリアンを、窓からこっそり見つめていたりする。マティルダの無意識の行為は、彼女が、自立した大人の男性として戻ってきたヘイドリアンが自分にとって恐るべき存在であることをすでに感じとっている、という事実を示している。

They were still watching the young soldier. He stood away at the bottom of the garden, with his back to them, his hands in his pockets, looking into the water of the willow pond. Matilda's dark-blue veins showing, dropped rather low. She carried her head light and high, but she had a look of pain. The young man at the bottom of the garden turned and looked up the path. Perhaps he saw them through the window. Matilda moved into shadow. (*EME* 98)

マティルダが父親と間違えてヘイドリアンの部屋に入ったのは、父親から遺産はすべてマティルダとエイミーに、ただし遺産の中から100ポンドと鎖つきの時計をヘイドリアンにやってほしいと頼まれた後のことだ。家や金は別として、父親が常に身に着けていた大切なものをヘイドリアンに譲ると言ったことに、マティルダは嫉妬心を感じていたのかもしれない。父親に対する近親相姦的な愛情、抑圧された性といった彼女の意識下に渦巻く感情が解放されるには、何らかの突破口が必要であった。マティルダは、自分の過失とはいえ、突然訪れたチャンスに戸惑いつつも、その境界を超えるか超えまいか、葛藤する。さらに、マティルダには、接触恐怖を克服するという課題が与えられている³。

これらの作品において、ロレンスが物語のターニングポイントとして、「触れる」場面を設定し、そこに神秘的な力を働かせていることは先に述べた通りである。有為楠泉氏は『21世紀のD・H・ロレンス』に収められた「ロレンスの自然とコスモス」という論文の中で、「人間が身体的知覚を媒介にして、真に他者の存在を知り、コスモスにおける太古から変わらないかたちでの実在のしかたを知る」(69)ことを「触知」ということばで表現している。『恋する女たち』と同時期に執筆された「馬仲買の娘」では、その「触知」の意義が純粹なかたちで描かれているといえるかもしれない。触知に導く感覚として、相手の無意識に作用する「目の力」も有効に使われている。ここでは、目の力はお互いをトランス状態にするのに有効である。見つめられ視線を感じることで、催眠術にかかったような状態に陥り、意識のレベルではなく無意識に近いレベルで行動させるからである。さらに、からだの臭い、これは、二人が生と死の境界で格闘した池の水の泥くさい臭いである。キッチンの燃える火の前で抱き合ったときの、ロマンティックとは程遠い状況こそ、混沌とした中で新たな生の誕生を期待させる。二人を再生させた池の水が、『恋する女たち』でパーキンが思い描いていた「生命の河」を十分に連想させる⁴。

「ヘイドリアン」でも、からだに触れ合うまでの過程で「目の力」が作用しているのは同じだ。自分ではあまり意識しないうちに、マティルダは兵士となったヘイドリアンのことを見ていた。さらに、死に瀕した父親を見ているうちに、彼女はトランス状態になり、夢うつつのままヘイドリアンに触れて

しまう。恋愛経験もないマティルダにしてみれば、トランス状態にでもならない限り、男性のからだに触れることなどできない。触れているあいだ、恍惚状態にあるマティルダは相手がヘイドリアンであることに気づかず、彼女の視覚は機能せず、夢うつつの状態のまま、父親とヘイドリアンは同一の対象になってしまっている。

一方、マティルダに触れられたことで何かに目覚めたヘイドリアンの目は、まるで獲物を追うハンターのようなものになる。マティルダにとっては不本意だったかもしれないが、結果的に、彼女は父親の願いを叶えるかたちでヘイドリアンを受け入れる。父親が連れて来たアウトサイダーは、娘しか残っていないロックリー家の後継者に、結果的にはインサイダーになるのかもしれない。娘を目覚めさせることは、父親の企みだったのかもしれない。このように考えると、父親の後継者となったヘイドリアンを、マティルダは父親の代わりとして愛するのかもしれない。実際に、ヘイドリアンがマティルダを連れてカナダに行ったのかどうかは、物語の中では明らかにはなっていない。マティルダが、女性として自分の中の母親的要素を捨ててヘイドリアンを愛することができるのかは、今後の彼女次第なのだ。しかし、マティルダがヘイドリアンに触れるという過ちがなければ、何も起こらなかった。マティルダは、男性に対して母親的ポジションでいれば安心だったわけで、明らかに自分の中の境界を超えることを恐れている。性に目覚めることも恐れている。ただ、あれほど優しくヘイドリアンに触れなければ、自分が何を恐れているかを知ること、無意識の領域に潜んでいる欲望に目覚めることもなかったのだ。世俗的な状況にあっても、不自然な偶然によってであっても、マティルダにとってのこの「触知」の瞬間は、彼女が女性として生きる可能性を開いた瞬間でもあることを、テキストは十分に示している。

おわりに（課題として）

「馬仲買の娘」と『恋する女たち』(*Women in Love*)が「再生」という大きなテーマで連動していたように、「ヘイドリアン」は、同時期に執筆された『ロストガール』(*The Lost Girl*)へと連動していく。「馬仲買の娘」は、ロレンスにとっても閉鎖的な時間と空間の中で生みだされた作品である。Harrisは、

戦後のロレンスはむしろ「再生」の物語を避け、「だれが導きだれが従うべきか、だれが支配しだれが服従するべきか」という、均衡よりも力関係を描く方に関心が移ったと述べている (152)。そのような見方をすると、確かに、「ヘイドリアン」の結末は曖昧である。最後にクローズアップされるのは、人生から去りゆく老いた父親の満足、不可解なまでの達成感であり、結婚した二人の幸福感ではない。きっかけを作ったのはマティルダだが、目覚めたあとはヘイドリアンの強引さばかりが目立つ。目覚めたはずのマティルダの無意識の欲望が、どのように開花するのかはわからないし、ヘイドリアンに「間違っていたということはわかっているさ。でも、忘れることなんかできるものか。男を目覚めさせたら、もう一度眠れと言われたって、男は二度と眠ることなんかできないのさ」(EME 106)と言われたマティルダには、反論する余地などないのである。ここで読者も、眠っていたのは娘ばかりではないのだということの思い知るのである。この短編では、ロレンスは、眠り姫のモチーフを用いて、触れる側と触れられる側、目覚めさせる側と目覚める側の境界を曖昧にして、その微妙な関係を提示してみせたのではないか。

そして、マティルダの無意識の欲望は、アルヴァイナの勇氣、行動力へと受け継がれ、ヘイドリアンのジプシー的要素、階級の異なる「肌の白い女性」を支配したいという欲望があるとすれば、それはチッチョに受け継がれる。『ロストガール』のアルヴァイナは、眠って待つタイプのヒロインではない。短編のヒロインと異なるところは、象徴的に目覚めていない（眠っている）状況にあったとしても、それを自覚している点である。自分自身が望むものを求めて行動し、階級だけでなく、自分の属するコミュニティを超え、さらには国籍の境界も超えてチッチョという男性を受け入れる。アルヴァイナのイングランドとの決別は、ロレンスの故国に対する絶望と重なり、後の作品では、さらに超えるべき境界も「他者」の持つ性質も変遷していくと思われる。

ロレンスの作品の中で繰り返し用いられる「眠り姫」のモチーフは、短編のジャンルにおいて、特に中期では「再生」の可能性を探るときに最も有効に機能している。「眠り姫」物語に登場する個々がそれぞれの目覚めを経験し、城、呪い、眠り、王子、目覚め、そして結末に象徴される意味合いを様々に変えて、テキストは重奏的な物語に仕上がっている。

以上、今回のワークショップでは、短編小説の中で用いられている「眠り姫」物語のモチーフを、中期の2作品を主に取り上げて考察した。長編では、短編のように物語全体が「眠り姫」物語を変奏させたかたちにはならないが、たとえば、『息子と恋人』(*Sons and Lovers*)のミリアムとポールとの恋は、待ち続けたが目覚めることができなかつた眠り姫と未熟な王子の物語として読むこともできる。『虹』(*The Rainbow*)のアーシュラの初恋は、待ち焦がれていた王子によって目覚めたものの、目覚めてみると求めていた王子ではなかつたことに気づくという、「眠り姫」物語の結末を否定するところから新たな成長が始まる展開となっている。アーシュラの場合、一度目覚めた彼女は「待つ」ことをやめ、次なる目覚めを求めて「行動する」ヒロインとなる。象徴的な「眠り」と「目覚め」は長編小説ではどのように展開されるのか、また他の作家の作品にこのようなモチーフが使われているのかを今後の課題としたい。

注

- 1 この作品が「眠り姫」物語の反転であることは、Harry T. Moore が指摘しており (411)、霜鳥氏は「〈眠り姫〉の悲劇——「プリンセス」におけるホワイト・セクシュアリティとメキシカン・レイシャリティ」において、「プリンセス」の悲劇の本質はレイシャリティの問題にあるとしている (17-32)。
- 2 *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. III. (301-02), 1918年12月5日付、キャサリン・マンスフィールド宛ての書簡を参照。
- 3 「ヘイドリアン」の物語は「カエルの王さま」のモチーフとも重ねて読むことができる。「カエルの王さま」の王女は、失くしたボールを見つけてくれたら自分の部屋に入れてもよいとカエルに約束をした。にもかかわらず、濡れたカエル(下層階級の男)に触れることを恐れ、カエルの再三の要求を無視している。約束は守るべきだと父親にたしなめられ、しぶしぶカエルを寝室に入れた王女がカエルを壁にたたきつけるとカエルは王子の姿になるという話だが、この行為は、王女が囚われていたもの(接触恐怖)が壊された(克服された)ことを意味しているとフェッチャーは指摘する (258-64)。マティル

ダは、偶然の過失によってヘイドリアンに触れたことで、接触恐怖を克服する可能性を与えられたと考えることもできる。

- 4 「馬仲買の娘」の水の場面と『恋する女たち』における「生命の河」との関係性については、横山三鶴「娘に託された奇跡——『馬仲買の娘』における再生の意味」、D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』（松柏社、2016年）を参照。

引用文献

- Harris, Janice Hubbard. *The Short Fiction of D. H. Lawrence*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers UP, 1984.
- Lawrence, D. H. *England, My England and Other Stories*. Ed. Bruce Steele. Cambridge: Cambridge UP, 1990. (鉄村春生・上村哲彦・戸田仁監訳『D・H・ロレンス短篇全集3』. 大阪教育図書, 2005.)
- . *The Virgin and the Gipsy and Other Stories*. Ed. Michael H. B. Jones and Lindeth Vasey. Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- . *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. III. Ed. James T. Boulton and Andrew Robertson. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Moore, Harry T. *The Intelligent Heart: The Story of D. H. Lawrence*. Harmondsworth: Penguin, 1960.
- Ruderman, Judith. *D. H. Lawrence and the Devouring Mother: The Search for a Patriarchal Ideal of Leadership*. Durham, NC: Duke UP, 1984.
- . *Race and Identity in D. H. Lawrence: Indians, Gypsies, and Jews*. New York: Palgrave Macmillan, 2014.
- 有為楠泉. 「D・H・ロレンスの自然とコスモス——『もの』との対峙において」. 『21世紀のD・H・ロレンス』. 日本ロレンス協会編, 国書刊行会, 2015. 52-72.
- 河合隼雄. 『昔話の深層』. 福音館書店, 1977.
- フェッチャー, イーリング. 『だれがいばら姫を起こしたのか』. 丘沢静也訳. 筑摩書房, 1991.
- ベッテルハイム, ブルーノ. 『昔話の魔力』. 波多野完治・乾侑美子訳. 評論社,

1978.

霜鳥慶邦. 「〈眠り姫〉の悲劇——「プリンセス」におけるホワイト・セクシュアリティとメキシカン・レイシャリティ」. 『D. H. ロレンス研究』第13号. 日本ロレンス協会, 2003. 17-33.

書評

Richard Owen, *Lady Chatterley's Villa:
D H Lawrence on the Italian Riviera*
(Armchair Traveller, 2014)

最初に、この本が出版された経緯について述べよう。

著者リチャード・オーエン氏は1960年代にノッティンガム大学の学生であったが、2010年まで『タイムズ』社に勤務していて、FAI (Fondo per L'ambiente Italiano) というイタリア版ナショナル・トラストの広告を見た時、初めてロレンスとリナ・マーチン (Rina Martin) に関心を持った。その広告には、イギリスの著名文人たちと関わりのあるイタリアの場所への観光案内が載っていたのだが、イタリアのリヴィエラと言われるリグリア州の首都スポトルノとロレンスのことも載っていた。オーエン氏は、この広告を見た時点では、それ以上にロレンスについて考えなかった。

さて、リナ・マーチンという女性は、ロレンスの作品を出版したマーチン・セッカー氏の妻であった人である。著者がロレンスとリナに再度関心を持ったのは、リナの息子エイドリアン・セッカー (Adrian Secker) の妻であるアンシーア・セッカー (Anthea Secker) からオーエン氏宛に、ロンドンの彼女の自宅ブリッジフット (Bridgefoot) には、リナからロレンスに宛てられた未発表の手紙やロレンスとフリーダからリナ宛てに送られた未発表の手紙が数多存在している、という連絡があったからである。エイドリアン・セッカーは『ロイター』、『デイリー・テレグラフ』、『フィナンシャル・タイムズ』のジャーナリストであったので、エイドリアン・アンシーア夫妻とオーエン氏は通信関係の仕事上の親交があったと思われる。著者はこの話を聞いて、偉大な作家ロレンスの未発表の手紙の一部を引用しながら、またリナやマーチン・セッカーの手紙等を部分的に引用しながらこれまであまり知られることがなかったロレンスとマーチンの妻の交友を公にすることで、ロレンス研究の発展になれば、と願っている。そして後書きでは、ロレンスとイタリアの関係につ

いて自分の意見を述べている。

1925年当時、リナはロンドン在中の夫マーチン・セッカーとは別居しており、息子のエイドリアンと二人でスポトルノの、ベルナルダ荘の隣に建っていたヴィラ・マリア荘に暮らしており、そこからロンドンの夫に宛てて手紙を書いたのである。リナは文才があったので、ジャーナリストの息子や他の人からロレンス一家との関わりを本に書いて出版するようにと勧められたが書かなかった。著者オーエン氏がこの本で書きたいのはロレンスの伝記ではなくて、リナの手紙に基づいて、ロレンスとスポトルノのベルナルダ荘やマリア荘等の関わりを甦らせ、イタリアのリヴィエラが結核で苦しんでいたロレンスを太陽やオリーブ畑や輝く海によってどんなに回復させたかを語ることであると述べる。

この本は序論から始まって全部で15章及び後書きから成っているが、オーエン氏が序論で述べたロレンスとスポトルノやフィレンツェの関わりのみではなくて、彼がフリーダと結婚する以前から書き始めている。つまり、リナと出会う以前のロレンス夫妻についても述べられている。

1925年にイタリアへ来てからもロレンスはメキシコへの郷愁を感じていたそうだが、ベルナルダ荘へ引っ越す前には『禁酒の起源』という本の書評を書いていて、そこにはイタリア人の飲酒を礼讃してメキシコでの禁酒を偽善的であると非難している。また、アメリカ大陸やイングランドでは人間が緊張状態にあって、それが機械文明のせいであると考え、それに反してイタリア地中海地方のいつも元気でのおんびりとした幸せな暮らし方をとても気に入っていた、とオーエン氏は繰り返し述べている。ロレンスは、イングランドでは「パート」という愛称を持っていたが、イタリアでは「ロレンゾー」という愛称を得た。

シシリー島では『てんとう虫、狐、大尉の人形』を書きあげ、その後ニュー・メキシコへ更に1923年にはメキシコへ渡った。1923年末にロレンス夫妻がイングランドへ戻ってきたとき、リナはハムステッドに滞在していたロレンス夫妻を訪問していて、だんだん彼女とロレンス夫妻は親密になっていったということである。1924年3月にロレンス夫妻はニューヨークへ出発し、その後ニュー・メキシコのカイオア牧場に滞在したが、そこから1924年6月にフ

フリーダはロンドン・ブリッジフットのリナに手紙を書いている。また、1924年10月には夫妻はメキシコのオアハカに行ったが、ロレンスは結核だと診断され、フリーダはリナに「ロレンスは彼の名譽を潰れて開かれた会食に出席した」と書き、リナは彼女にラヴェンダーが入ったカバンを贈った。ロレンス夫妻は、リナの父親が所有していたミラメアホテルがスポトルノにあったためにスポトルノへ行ったということである。

Lady Chatterley's Lover (以下 *LCL* と表記) のコニーのモデルについて、フリーダはリナが影響を与えたと述べているが、オーエンはフリーダが基本のモデルであると言っている。リナには文才があることに気が付いたロレンスは、彼女に作家になったらどうかと勧めていた。また、リナは息子の出産後に精神的に不安定になっていて、療養のためにロンドンからイタリアの地中海の太陽の中へ来たのであり、彼女の手紙に書かれている内容、神経消耗、不安神経症、鬱状態は、*LCL* でコニーが精神的に「不安定になっていった」様子と著しく似ていると、オーエンは述べている。

1925年11月15日にロレンス夫妻はスポトルノに到着し、リナの仲介によって、アンジェロ・ラヴァリ (Angelo Ravagli) が家主になっているベルナルダ荘に11月23日に引っ越した。ベルナルダ荘はラヴァリの妻セラフィナが所有していたものである。ラヴァリは初めてフリーダに会ったときから彼女が彼を誘ってきた、と回想をしているようだ。

ロレンスは短編“Sun”の主人公としてリナを書こうと思い始めていた。ロレンスが実在の人物を小説の中でどのように扱ったかについて、著者は、J. ワーゼンの意見に同意しており、ロレンスは人物像を再創造したのであって、“Sun”のジュリエットはリナその人ではないが、彼女からインスピレーションを受けたのであり、同時にモーリスも M. セッカーではない、と述べる。

1926年2月のリナの手紙によると、フリーダとロレンスを訪問していた彼の妹エイダはいつも大喧嘩をしており、エイダは彼をフリーダから引き離そうとしていたが、リナはエイダに同情していた。一方で、著者はロレンスが結婚を信じていたし、フリーダとの結合は彼の「ライフワーク」であったと述べている。また、オールディントンやワーゼンと意見を同じくして、著者は1926年以降ロレンスの性欲が衰えてきたと思うと述べる。

1926年4月末にロレンス夫妻はフィレンツェに到着し、5月6日に、ラウル・ミレンダ (Raul Mirenda) が所有していたミレンダ荘 (6部屋付) を1年につき3000リラで借りた。ロレンスは今やアンブレラ松にもたれて *LCL* を書き始めていた。著者の意見では、この小説は“Sun”及び *The Virgin and the Gipsy* の主題から発展した主題を持っており、それは女性が自分の階級とは異なる階級の男性と一時的ではない永遠の関係を持てるかどうかというものである。著者は、この本の主題は性であると同時に階級であるとする。フリーダによれば、ロレンスはクリフォードと森番の両方と同一化される。この頃、ロレンスはリナと会いたがっていて、リナやマーチン・セッカーに手紙を書いている。

1927年2月にはロレンスはブルースターと共にエトルリアへ旅をし、この旅行が *LCL* 第3版の執筆に影響を与えた、と筆者は考えている。実生活では、ロレンスはフリーダとラヴァリの付き合いにイライラを募らせていた。筆者は、方言と標準語を使うメラーズとラヴァリは似ていると考える。ラヴァリの意見では、フリーダはラヴァリとの付き合いをロレンスに語って彼の想像力を刺激したという。また、ミレンダ荘で描かれた多くの絵が1928年にロンドンで展示された時押収された。フリーダはパリのプロデューサーに *LCL* 映画化の権利を売り、映画製作者側はリナのこの本における役割 (彼女がインスピレーションを与えていたこと) の話を聞きたがっていたが、リナは表に出ることは望まなかった。リナは自分がフリーダにラヴァリを紹介したことを後悔していた。

著者は、さまざまな研究者の意見を参照しながら、イタリアがロレンスにとっていかなる意味で重要な国であったかを検証している。彼は、ロレンスが、イタリア人が直観的かつ精神的である点を好ましく思っており、イタリアが階級意識から解放されていると考えていた、と述べている。一方で、ロレンスは、マーチン・セッカーへの手紙ではイタリア生活の不満も述べている。著者は、ロレンスは死が近づいてきた頃、キリスト教以前の異教文化にひかれるようになったと思っている。オルダス・ハックスレーの意見を採用しながら、著者は、ロレンスの生命力の強さとイタリアおよび地中海の生命力の源が感応しあったのだ、と考えている。南方、地中海地方、南部イタリアに残っ

ている古代ギリシアの風景は、ロレンスにとって再生を約束する場所であったのだ、と。

ロレンスは外国に住んだ期間が多かったが、このことがかえて彼にイギリスを意識させていた、しかし彼が帰属意識を持っていたのはイギリスではなくて、一番近いと考えたのがイタリアであった、と著者は捉えている。また、ロレンスの作品には強い自我と独立心を持った女性たちが数多く登場している（グッドルーン、アーシュラ、コニー、ジュリエット等）こと、そして *Women in Love* のロレンスの分身であるバーキンの有名な男女論「星の均衡」を鑑みて、ロレンスがフェミニズム批評でバッシングされたことをもう一度考え直すべきではないか、と問いかける。ロレンスはフェミニストであったというのが著者の意見であるが、筆者もこの意見にはかなり賛意を表したい。

レモンの香りが漂ってくるような、鮮やかな太陽の色を思わせる赤い表紙は、本の内容とあいまって目を惹きつける。この表紙にはロレンスとリナが一緒に写った写真が載っている。本書を読んで、ロレンスとイタリアの関係について筆者なりに考察を進めようと思ったし、フリーダの存在の大きさに圧倒され、男女の関係の不思議さに改めて感慨深いものを感じた。リナとの交流を書いた本書は、ロレンス研究に新たな視点を与えてくれるものであると思われる。

(山田 晶子)

David Game, *D. H. Lawrence's Australia:
Anxiety at the Edge of Empire*
(Ashgate, 2015)

本書は、オーストラリアにロレンスがユートピア創造の可能性を見出していたのではないか、という仮説に基づき、オーストラリアがロレンスに与えた文学的なインスピレーションについて、視野深く緻密な論考を展開している。アメリカ滞在と比較すると、ロレンスのオーストラリア滞在は3か月と

短く、オーストラリアを主な舞台とした長編は、『カンガルー』(*Kangaroo*, 1923)と『ユーカリ林の少年』(*The Boy in the Bush*, 1924)の2作品に限定される。しかしゲーム(David Game)は、ロレンスの文学活動の軌跡を丁寧に展望した上で、オーストラリアに関するロレンスの言及が、彼の初期作品から死の直前に書かれた手紙の中にまで見られることを論じる。議論にあたり、ロレンスの離国をダーウィニズムとの関連で分析する点が、本書の特異な点であると言える。

本書は12章構成になっており、各々の章でゲームは、ロレンスのオーストラリアへの興味が、先行するイギリス文学の影響を受けていることを述べながら、ロレンス作品とイギリス文学の間テキスト性を明らかにする。各章の概要は以下の通りである。

1章はまず、ダーウィン(Charles Darwin)の『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859)と、20世紀初頭のイギリス社会との相関関係について、キリスト教や戦間期という文脈から読み解く。そして、社会ダーウィニズムとして広く認知されるようになったダーウィンの主張が、「退化(degeneration)」と「再生(regeneration)」という概念を、イギリスで一般化させるに至った歴史を概観する。キリスト教のような絶対的な「イズム」と化した社会ダーウィニズムへのロレンスの嫌悪を、中期の短編集の中に見ることができると主張するゲームは、退化と再生という概念に対して、ロレンスが独自の見解を提示したことを指摘する。ロレンスにとって、退化と再生とは、和解しがたい2極というよりむしろ、1枚のコインの裏と表を構成する概念なのである。そして、ゲームによると、この概念を適応したのが、ロレンスのオーストラリア小説であるのだ。第一次大戦で露呈した西洋文明への失念が確かに存在する一方、探求の先には、“regeneration”という言葉で表象されるような、「新しい世界(a new world)」もまたどこかに存在するのである。ロレンスにとって再生の希望は、大英帝国の果てに存在するオーストラリアに託された、これがゲームの興味深い見解と言える。

2章では、エドワード朝の身体への意識の高まりが、ダーウィンの退化論に起因することが論じられる。しかし一方、戦時中の恥辱的な徴兵検査が、ロレンスが優生学に対して否定的な見解を下す決定的な要因になったと述べら

れ、ウェルズ (H. G. Wells) をはじめとする当時の知識人とロレンスの間に見られる思想的断絶が論じられる。その結果ロレンスは、優生学に依存しない再生の在り方を、男女のセクシュアリティと共同体に求めた。1915年以降、ロレンスの共同体への意識は高まるが、彼の理想の共同体の礎となったのが、マリー (J. M. Murry) と共に思い描いた「ラナニム (Rananim)」である。コーンウォールではその共同体形成は失敗に終わったが、ラナニム追求の中に再生への希望を見出したロレンスは、オーストラリアを共同体形成の舞台として選び、そこに希望を見出す。ディケンズ (Charles Dickens) らヴィクトリア朝の作家に見られるような、コロニアルな視座を持ちながらも、西洋文明の腐敗から再生する手段として、ロレンスはオーストラリアでの共同体形成を思い描いたのだ。その試みとして書かれたのが、『ユーカリ林の少年』である、というのがゲームの主張である。

3章では、ロレンスが滞在初期に抱いた、オーストラリアの印象が語られる。まずゲームは、ロレンスがオーストラリアに対して幻想を抱いていたことを論じる。しかしゲームは、コテリアンスキー (S. S. Koteliansky) への手紙を援用しながら、ラナニムに対するロレンスの懐疑心だけではなく期待感を明らかにする。そして、北西オーストラリアに、ラナニムの可能性をロレンスが当時見出していたことを、彼の手紙を証拠として提示しながら論じる。しかしながら、オーストラリアへの幻想とその真実は、和解しがたい概念としてロレンスの中で衝突していたのも事実である。

ゲームの緻密な論証は、4章に端的に表れている。4章は、1922年以前のロレンス作品に見られるオーストラリアへの言及を丁寧に拾い上げ、オーストラリア表象の変遷を追う。ゲームは、オーストラリアへの言及がある作品群を3グループに分類する。例えば、「バラ園の影」(“The Shadow of the Rose Garden”) の原型である“Vicar’s Garden”や、長編『白孔雀』(*The White Peacock*, 1911) などの初期作品には、サイード (Edward Said) の唱える西洋中心的な他者論を適応することができる。そして、オーストラリアと英国の距離的な隔絶感が、死を連想させるような否定的な存在としてのオーストラリア表象を助長させたと論じられる。一方、1913年から1921年までに執筆された短編集『英国よ、わが英国よ』(*England, My England and Other Stories*, 1922)

では、移住という観点から、より現実的な存在としてオーストラリアを捉えている。しかし、それ以上にゲームが注目するのは、1920年に発表された『ロスト・ガール』(*The Lost Girl*)である。この作品の中で初めて、グレアム(Alexander Graham)というオーストラリア人が登場することにゲームは着目する。グレアムは再生のエネルギーを秘めた人物として描写され、オーストラリアは『ロスト・ガール』の中で、ラナニム形成の可能性を秘めた場所として描かれている。1920年を契機として、ロレンスのオーストラリアへの本格的な傾倒が始まるというのがゲームの主張であり、オーストラリアへのロレンスの眼差しは、前述したように、移住の問題と深く結びついていると彼は考察する。

5章では、前章の末部で触れられた移住の問題に対するロレンスの興味を検証する。ゲームは、『カンガルー』の中でサマーズ(Richard Lovatt Somers)が、オーストラリア人によって“pommy”と呼ばれていることに着目しながら、サマーズ夫妻を、単なる旅行者ではなく、移住の可能性を秘めたカップルとして見做す。さらにこの章では、R. L. スティーブソン(R. L. Stevenson)の『素人移住者』(*The Amateur Emigrant*, 1896)と『カンガルー』との間テキスト性が指摘される。登場人物のイニシャルや舞台となる地名の類似だけではなく、両作家がオーストラリアを精神的ホームとして希求している点にも共通項が見られるからだ。しかし、オーストラリアの政治への実践的な参加を拒否する時、サマーズのオーストラリア滞在は、移住ではなく単なるロマンティックな旅と化す。共同体ラナニムが現実的なものではなく、サマーズのロマンの中にある幻想であることが露呈されるのだ。

6章では、民主主義の熟成に退化を見るというロレンス独特の価値観が論じられる。これまでの『カンガルー』研究は、政治や愛の概念からのアプローチが多く、退化の視点から論じられた研究が少ないことを踏まえながらゲームは、文明の腐敗を民主主義の隆興に見るピートリー(Hinders Petrie)の*The Revolutions of Civilisation* (1911)とロレンスの思想との類似を指摘する。また、ロレンスが1907年に読んだとされるニーチェ(Friedrich Nietzsche)の『権力への意志』(*Will to Power*)を援用しながら、退化が再生や超人の誕生の可能性を内包していることを主張し、1枚のコインの裏表として、退化と再生が存在していることを論証する。

7章では、詩集『鳥と獣と花』(*Birds, Beasts and Flowers*, 1923)に収められた詩「カンガルー」("Kangaroo")にまで考察を広げ、動物のカンガルーがオーストラリアという土地の象徴として表象されていると論じられる。また、『カンガルー』の中で、サマーズが動物のカンガルーに餌をやる場面を取り上げながら、西洋人の入植以前のアボリジニ社会と動物カンガルーが、西洋の近代化に先行する存在として肯定的に論じられる。

8章では、ロレンスが、アボリジニ社会の中に人間の再生の可能性を探っていたことが論じられる。ゲームの考察で印象的なのは、ロレンスのアボリジニに対する知識が、文学だけではなく、ハリソン (James Harrison) の『古代芸術と祭式』(*Ancient and Ritual*, 1913) やフレイザー (Sir James Frazer) の『金枝編』(*The Golden Bough*, 1890-1915) などの考古学の影響を多大に受けているという点だ。そして考古学から、アボリジニとトーテムとの繋がりに興味を持ったロレンスは、ラッセル (Bertrand Russell) への手紙の中で、知性ではなく、原始的社会の在り方に、人間の再生の希望を見出したと述べている。その原始的社会の特徴は、“blood knowledge”という言葉を通して、フレイザーとの関連で熟考されている。

9章では、大きく視点が変わり、『ユーカリ林の少年』がジェンダー的視点から再検討される。まずゲームは、結婚をめぐるロレンスの葛藤の軌跡を概観する。そして、ジェンダー議論におけるロレンスの一般化された解釈を、ミレット (Kate Millett) やルーダーマン (Judith Ruderman) の主張をもとに明らかにする。しかしゲームは、ミレットのロレンスへの批判を認識しながらも、現代の結婚生活に対抗する手段として、ロレンスが母権社会 (matriarchy) を『ユーカリ林の少年』の中で描いたと主張する。また、ジャック (Jack Grant) の結婚観を明らかにしながら、モダニティを否定する1つの手段として、ロレンスが重婚 (bigamy) を描いたことが論じられる。重婚という新しい男女関係の在り方がロレンス文学に導入されたのが、オーストラリアを舞台とした作品だという点は注目に値する。また、従来の結婚観を否定するためにロレンスが、西洋文明の支柱である聖書の大胆な読み直しを行ったという主張は興味深い。

10章でも、キリスト教の見地からロレンスのオーストラリア作品が分析さ

れる。ゲームは、バニヤン (John Bunyan) の『天路歷程』 (*The Pilgrim's Progress*) とロレンスのオーストラリア作品を比較し、ピューリタンの思想に基づくバニヤンの作風のロレンスへの影響を指摘する。

11章では、オーストラリアとの関連の中で、『セント・モア』 (*St. Mawr*) が論じられる。ゲームによると、『セント・モア』は、ロレンスがオーストラリアに傾倒した時代の最後を飾る作品である。1920年の『ロスト・ガール』に始まるロレンスの「オーストラリア時代 (Australian Period)」は、1925年の『セント・モア』で幕を閉じるというわけだ。この5年間に執筆された作品すべてに、オーストラリアへの何らかの言及や示唆があるという事実は興味深い。この章でもゲームは、第一次大戦の衝撃から立ち直る希望を、ロレンスがオーストラリアに託していたことを繰り返し強調する。

最終章は、ロレンスが交流を持った最後のオーストラリア人である P. R. ステューブソン (P. R. Stephenson) とロレンスとの交流を概観する。『三色堇』 (*Pansies*) の序文には、ステューブソンのロレンスへの影響が吐露され、オーストラリアに再生の希望を見出したロレンスが、ステューブソンの文学的所業に期待を持っていたことが論じられる。さらに、ロレンスが死の約1カ月前にルーハン (Mabel Dodge Luhan) に宛てた手紙が考察される。この手紙の中でロレンスは、オーストラリアで見たミモザについて語る。ミモザは、『カンガルー』の最後の場面で、光溢れる風景と共に描かれるが、春を迎えたオーストラリアで見たミモザが、サマーズにとって、美しい再生の象徴 (a beautiful symbol of regeneration) であるとゲームは指摘する。また、ルーハンへの手紙を書いたのと同じ日にロレンスは、ミモザについて言及した手紙をもう2通書いており、フリーダ (Frieda Lawrence) もロレンスの棺にミモザを詰めたことを回想している。本書の表紙にミモザが描かれていることから分かるように、再生の象徴としてのミモザの文学的役割や意義が、最終章を通して明らかになる。このように、最終章では、オーストラリアが再生の希望の象徴として、晩年のロレンスの胸に依然として刻まれていたことが論じられる。

以上のように本書は、ロレンスのあらゆる作品を精読しながら、大英帝国から遠く離れたオーストラリアへのロレンスの興味が、一過性のものではな

かったことを論証する。ロレンスは確かに、社会ダーウィニズムの影響を受け、退化に対して不安を抱いた。その不安は、彼のオーストラリア表象の中に見ることができる。また、オーストラリアでの理想の共同体形成は、失敗に終わった。しかし、オーストラリアへの執拗なまでのロレンスの文学的傾倒を詳細に論じるゲームの著書は、ロレンス文学におけるオーストラリアの意義や役割を再考することに大いに貢献している。

(加藤 彩雪)

日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』 (国書刊行会, 2015)

日本ロレンス協会編の論文集としては1995年に上梓された『D・H・ロレンスと現代』以来のものとなる。

本書は、「あとがき」で編集作業を担当した新井英永氏が述べているとおり、日本ロレンス協会元会長和田静雄先生のご寄付がきっかけとなった。このご寄付の用途を協会執行部で協議する過程で、論集出版企画が提案された。熟議の末、論集作成が決定し、そのための編集委員会が設立され、この度、和田先生のご寄付を活用しての出版と相成った。実は、評者は、当時、協会執行部に属していて、その話し合いにも参加していた。評者は、論集出版の企画には、会員の減少に悩んでいる学会に果たして十分な数の執筆者がいるのかという理由で、反対だった。

ところが、どうだろう？ 実にりっぱな本が出来上がった。装丁もページの地の上の金字のタイトルが重厚感を与える落ち着いた見事なものだが、それ以上に、中身がいい。「まえがき」で新井氏とともに編集を担当した浅井雅志氏が述べているように、ロレンスの国際学会での発表やそれに基づいた論文集のレベルと比べても遜色のない優れたものだ。評者はかつての自らの浅見を恥じなければいけない。協会会員の方々の實力を見誤っていたのだ。敬称略で失礼させていただくが、飯田武郎、鈴木俊次、有為楠泉、遠藤不比人、

大田信良，巴山岳人，三宅美千代，木下誠，加藤洋介，山田晶子，岩井学，倉持三郎，大平章，小林みどり，増口充，以上 15 名の執筆者に最大限の敬意を払いたい。

さまざまな世代の，さまざまなアプローチが共存していて，それぞれがその人なりの登り方でそれぞれの高みに達しているところが嬉しい。5つのセクションに分かれている。いずれの論文も，そのやり方はいろいろだが，ロレンス文学を歴史の中にしっかり位置づけた上で，論を展開している。

セクション I 「自然・コスモス・異教」は，ロレンスの反合理主義的な思想を世界思想史の中に位置づけることをライフワークとする飯田武郎氏の論文ではじまる。4世紀末ローマの首都長官シンマクスの異教擁護の精神がギボンの『ローマ帝国衰亡史』を通じてロレンスに受け継がれているのではないかという論旨である。気宇壮大な問題意識の下，堅実なりサーチと緻密な読解を示すのは飯田氏の真骨頂と言える。続く，鈴木論文は植物学・生物学を軸にロレンス文学を当時の知的風潮の中に位置づけたもの。実はこの鈴木氏の関心は評者のそれと重なるところがあり，評者自身，かつて，ある論文でハーバート・スペンサーの *First Principles of a New Philosophy* を分析したことがある。しかし，鈴木論文は，さらに *The Principles of Biology* など他の著書にも言及し，また最近の研究（たとえば Christina Alt や M. M. Mahood の著書）への目配りも怠らず，視野の広さが際立っている。飯田論文の特徴が一徹に一筋の道を突き進む突破力にあるとすれば，鈴木論文のそれは広くバランスの取れた目配り力にある。そして，有為楠論文は，ロレンスの自然論を同時代の文脈の中に置きながら，最後に「もの」の二重性に注目するところがとても刺激的だ。堅実な展開の後に，ロレンスの「もの」をめぐる洞察で読者をはっとさせる。三本，それぞれ，堅実かつ個性的な好論文である。

次のセクション II 「無意識・政治文化」は，日本英文学界切っけの論客二人のロレンス論。遠藤論文は，氏の心理学とりわけ力動的心理学史に関する知見を活かし，ロレンスが『精神分析と無意識』や『無意識の幻想』などで展開する無意識論を歴史化した上で，現代におけるその可能性を露わにして見せる力業。Jameson の情動論との関連の指摘も興味ぶかい。大田論文は，功利主義の伝統の 20 世紀的変奏としてロレンスと関係の深い F. R. Leavis と

Keynes の文章を読み解く、これも力業。その文脈を意識してロレンスの「偉大さ」を論じなければいけないと言う。かつては、遠藤氏や大田氏に率いられた理論派とそれ以外の研究者が覇権を争うような雰囲気があったが、今こうしてセクション I とセクション II を一気に読んでみると、むしろ、両者がどう繋がるのかが気になってくる。評者としては、*The Rainbow* の例の顕微鏡シーンが気になる。今後の宿題とさせていただきたい。

セクション III 「雑誌メディア」は、若手から中堅世代にかけての、脂が乗った三人の研究者の論考。巴山論文は、青年ロレンスの思想と同時代の雑誌『ニューエイジ』との共通点と差異を丁寧に論じ、最後に『白孔雀』読解と絡める。三宅論文は、ハーレム・ルネサンスに属する二つの黒人小説についてロレンスが書いた書評を同時代の文脈に戻して位置づけ、ロレンスの世界観の限界を描き出す。木下論文は、『建築評論』に掲載されたロレンスのエッセイ「壁に掛けられた絵」の歴史的な文脈を明らかにする。このエッセイの掲載が、アーツ・アンド・クラフツからモダン・ムーヴメントに英美術界が移行する過程と絡んでくるのがよく分かる。いずれも、視点の面白さとリサーチの充実が相俟って、第一級の論考となっている。

セクション IV 「作品論——『息子と恋人』、「イギリス、私のイギリス」、「指貫」」には、三つの作品論が並ぶ。まず、はじめの加藤論文は『息子と恋人』に現れる暗闇を、ニーチェ哲学およびそれと関連する世紀転換期の生物学的思想の文脈に置きながら、丁寧に分析してゆく。『D・H・ロレンスと退化論』で19世紀末から20世紀にかけての知的な風潮を見事に描きだした彼が、ここでは一作品に専念して論を展開するのが面白い。その論の展開の丁寧さが、かえって彼の多才さを浮き彫りにしている。山田論文は、さまざまに解釈されるロレンスの短編「イギリス、私のイギリス」の主人公エグバート像を肯定的なものと捉え、作品の最後には再生のヴィジョンが提示されていると読み解く。蛇と鎌のシンボル分析が印象的である。シンボル分析は最近あまり流行らないものの、それは単に流行りの問題であって、山田論文を読むと、こういうアプローチもきちんと扱われるとやはりいいものだ、と思う。岩井論文は、短編「指貫」を同時代の大衆小説（バータ・ラックの「腕の中の幼子」）と比較検討し、両者の共通点と差異を巧みに描き出した。上手い！ というか、

思い返してみれば、岩井氏は昔から上手かった。ただ、ある種の円熟というか深みを感じられるようになった。

セクションⅤは「裁判・教育・哲学・翻訳」と題されているが、この括りは些かまとまりがない。ロレンスの思想と老荘思想の近さを証する小林論文はセクションⅠに移してもいいような気がする。とはいえ、これはこの種の論集を編纂する際に必ず起きる問題で、殊更に問題視する必要はないだろう。この種の比較思想的な試みは近年影が薄いけれども、これも単なる流行りすたりの問題なので、小林論文を面白く読んだ身としては、もっとこの種のアプローチがあってもいいのではないかと思った。とりわけ読書経験を積んだベテラン研究者が大所高所から大局を見わたすロレンス論がもっとあっていい。ところが、ロレンス研究の長老として尊敬される倉持氏は、今でも綿密なりサーチに基づく論文を書き続けている。その努力には頭が下がる。日本のチャタレイ裁判で採用された「ヒックリン判定基準」の成り立ちを19世紀半ばのムヌース神学校への政府補助金支出問題に見て、元は進歩的・啓蒙的な司法判断だったものがその後かえって反動的役割を演じてしまった歴史のアイロニーを指摘する。大平論文は、ロレンスの教育論を、同時代あるいは些か後の時代に属するラッセル、T・S・エリオット、A・ハクスリー、H・リードらの教育論と比較考察し、ロレンスをイギリスの教育論の伝統の中で捉えることの大切さを説く。最後にロレンスの小説そのものの教育者的な部分に触れるところがとりわけ面白い。目から鱗が落ちた。そして、増口論文は、氏の日本におけるD・H・ロレンス研究史に関する圧倒的な知識を背景に、新美のロレンスの一短篇の翻訳という小さなテーマに徹底的に集中するという、増口氏の面目躍如と言うべき出来栄え。そのリサーチの徹底性、その考察の緻密さ、いずれも、圧倒的に凄い。増口氏には是非、これまでの研究成果を本にまとめていただきたい。

さて、この学的豊穡に興奮した後で、この達成の先に何があるのか、タイトルが示唆するとおり「21世紀のD・H・ロレンス」研究は安泰なのだろうか、ということを考えはじめると、些かの不安に襲われる。2014年のイタリア、ガルダ湖畔ガルニャーノでのD・H・ロレンス国際学会の成果を振り返ってみると、イギリスでは、大御所 John Worthen や Michael Bell、中堅 Sean Matthews や

Andrew Harrison も健在な中、2017年7月のロンドン国際学会のオーガナイザーを務める Catherine Brown や Annalise Grice など若手研究者が順調に育ってきており、国文学の重要な一部としてロレンス研究はこれからも続いていくのではないかと思われる。北米の状況見通しはこれよりは暗く、何よりも中堅、若手に元気がないのが気になる。フェミニズムをはじめとする文学理論がロレンスを抹殺したのだろうか。そして、さらに心配なのは、日本の状況である。文学的な英語を味読して喜びを感じる頻度が大学でぐんと減った。卒業論文では文学よりも映画が人気のこの頃で、教員もその対応に追われているといった有様ではないか。（評者も、『教室の英文学』（研究社、近刊）という本に寄稿して、英文学教育の問題を論じているのだが。）絶滅危惧種という言葉が脳裏をよぎる。

だが、とにかく、わたしたちがロレンスから学んだものの内これだけは若い人たちに伝えたいと思うものを困難な状況の中で伝えてゆく努力をつづけていかななくてはならないだろう。そして、わたしたちが——少なくとも、わたしが——ともすれば挫けそうになるとき、きっとこの『21世紀のD・H・ロレンス』の成果は、わたし（たち）を励ましてくれることと思う。心から感謝したい。

（武藤 浩史）

D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』 （松柏社、2016）

『ロレンスの短編を読む』と題された本書は、その表題の見かけの簡潔さとは裏腹に、文字通り「ロレンスの短編を読む」ことをめぐる問いの豊かさを明らかにする。いうまでもなく、短編というジャンルへの着目は、本書の中でも明言されているように、長編こそが主要作品とみなされがちな作家において、研究の対象として取り上げられることが少なかった作品群を拾い上げる、という意味があるのは確かである。だが本書の特異性は、単に顧みられ

ることが少ないジャンルを扱った研究書という枠組みを遥かに越え、「短編」というジャンルそのものへの問い、そして「読む」という行為そのものへの問いを誘発させながら、「短編を読む」という作業を通してはじめて見えてくるロレンス像を提示している点にある。

本書を編んだロレンス研究会が、1973年以降にロレンスの主要長編作品や紀行文についての研究書を数多く発表しながら、その中で短編を扱う本書になって初めてタイトルに「読む」という表現を入れていることは、極めて示唆的である。なぜ短編というジャンルを扱った本書において、研究書という体裁からは当たり前とも思える「読む」という表現をわざわざ入れなければならなかったのか。各論文の前に「序」として付された浅井雅志氏の「ロレンス——「素顔」の短編小説家」は、ロレンスという作家と短編というジャンルの関係それ自体を掘り下げながら、ロレンスの短編を「読む」ことについてのひとつの重厚な論考になっている。その中で浅井氏は、短編というジャンル全般の特徴の一つとして、人生の一樣相をスナップショットのように切り取り、アメリカ人作家エドガー・アラン・ポーがいうところの「効果の全体性あるいは統一性」を喚起させる形式であることを挙げている。エピソードや会話を重ね続けてつくられる長編に比べたとき、スナップショットに喩えられるその全体性や統一性とは、短編というジャンルの「読みやすさ」と言い換えていいだろう。だがここで思い起こさなければならないのは、ロレンスという作家が、何よりも視覚による安易な認識に対して根源的な問いを投げかけていた作家であったということだ。私達読者は得てして読みやすい短編を安易に分かったような気持ちになってしまう。しかしそれは、ロレンスが問いを投げかけた、スナップショットを安易に「見る」という認識の仕方にはほかならないだろう。読みやすさを特徴とする短編こそ、かえって「読む」ことが必要とされるのだ。

浅井氏は続けて、「ロレンスの短編」に独自の点として、ロレンスがスナップショットのように切り取った短い物語に、自身の小説観である「哲学とフィクションとの再結合」を実現しようと試みていることを挙げる。研究の対象になりやすい長編においては、その試みは会話やエピソードの積み重ねを通じた対話的な手法によって行われている。ロレンスにとっての短編とは、そ

うした長編の対話的な手法で描けないものを扱おうとしたのではないかと、その試みの解明には、スナップショットとしての短編を、「見る」のではなく「読む」ことこそが要求されるだろう。序に続いて収められた10篇の論文は、この意味において、まさにロレンスの短編を読むことの優れた実践としてある。

最初の論文である山田晶子氏の「春の亡霊たち」論——メラーズの前身としてのサイスン」は、短編の登場人物と長編の登場人物を比較しながら、それを単なる類似に収斂させることなく、両者の間にあるダイナミックな関係を的確に浮き彫りにしている。「春の亡霊たち」の主人公サイスンと彼に対峙する森番ピルビームは、一見するとそのまま『チャタレー卿夫人の恋人』のクリフォードと森番メラーズにそのまま当てはめることができそうな類似性を持っている。しかし山田氏は、サイスンの中にクリフォード的な要素を認めながらも、故郷の森に憧れるが「苦々しい自嘲」をしている姿にロレンスの代弁者たる要素を読み込み、そこにメラーズに変貌すべき前身としての性格があることを指摘する。

石原浩澄氏の「文学批評と公共圏——「牧師の娘たち」を読むレビュー」は、短編を読み、そして解釈する批評という行為をめぐる論考で、本書が提示する「読み」の問題それ自体に際立った色合いを添えている。石原氏はレビューの文学批評そのものを取り上げ、それが孤独で孤立した作業ではなく、共働して行う行為、特に、それを通して価値形成や文化形成が行われる公共の行為としてあることを紹介する。そしてその実践例としてレビューの「牧師の娘たち」の批評の実践を取り上げ、引用文の多さや人称の使い方などに注目しながら、その公共性を鮮やかに描き出していく。

岩井学氏の「労働者階級の肉体に映し出される中産階級の恐怖心と羨望——「牧師の娘たち」,「ヘイドリアン」,後期エッセイに見る階級観の変遷と相克」は、短編作品の表層的な筋から導きだされる一義的な読み方を斥け、短編が重層的なテキストとしてあることを明晰に論じている。異なる階級の価値観の相克が主題となっている二作品は、しばしば「ブルジョア批判／労働者賛美」という単純な読みへと回収されてしまう。しかし岩井氏は、登場人物たちの異なるように見える身振りが実のところ中産階級が抱えるアンビバレントな態度、労働者を賞賛と恐怖の両方の対象としてみるというアンビバレントな

態度であることを明らかにしている。

浅井雅志氏の「愛情的世界内存在」を求めて——「プロシア士官」論」は、やはり安易な解釈を拒む短編のアンビバレンスを明らかにしている。もともと対象作品は「同性愛」と「再生」という問題から論じられることが多く、そうした論の多くは、そのキーワードにそのまま寄りかかるように、単純な結論に流されてしまうことも少なくない。それに対して浅井氏は、ロレンスが同性愛を観念に縛られた近代人の病理と捉えていたことを論証し、それゆえ一見すると融合にも見える終わり方は、実のところ疑似融合にほかならず、「再生」があるとしても、それは彼らの後にくるものでしかない、とそのアンビバレンスにどこまでも精緻に寄り添いながら作品を読む。

山本智弘氏の「桜草の道」とオーストラリア——アイデンティティーの揺らぎ」は、分量の制限がそのまま空間的な制限にもなりがちな短編作品において、そこで直接描かれるイギリス空間と間接的に描かれるオーストラリア空間との関係を読み解いていく。山本氏は、主人公のサットンが当時の様々な英文学作品において否定的なイメージで描かれていたオーストラリアから帰ってきたという設定が、病床の妻との対峙の場面にも、愛人との場面にも影を投げかけていることを明らかにしつつ、サットンが抱える自分の居場所に対する不安とアイデンティティーの喪失の内実を詳細に説明している。

横山三鶴氏の「娘に託された奇跡——「馬仲買の娘」における再生の意味」は、短編というジャンルに特有の唐突で不自然な展開に、その必然的な意味と独自の意味を読み込んでいく。メイベルという登場人物をめぐるこの短編もまた「再生」という主題を読み込む批評が多いが、突然の愛の告白とプロポーズをめぐる展開について議論が割れている。横山氏はそこに、おとぎ話としての意味合い、特に「眠り姫」の意味合いを読み込むことで、メイベルが体験する奇跡が、愛の勝利以上に「母親の呪縛からの解放」の物語となっていると指摘する。

有為楠泉氏の「氷柱の向こう側——「馬で去った女」の射程」は、旅をモチーフにした短編が描く「紀行文に存在しえないカタルシス」を剔出する。白人の女性である主人公が生贄にされるという議論が別れる筋に対し、有為楠氏の論文は、異文化の中で感覚機能の変容を迫られる主人公が、幻視に陥るこ

となく強力な観察力を示し続けていることに着目し、それがロレンス自身の言葉でいう「内面から生じる最も完璧な暗示に自らを委ねる勇気」をもった態度であることを指摘する。

田部井世志子氏の「馬ではなく、蛇が……——「セント・モア」におけるキー・イメージ」は、セント・モアという馬を中心にみると一貫性を欠くようにみえるテキストを、蛇をキー・イメージにすることで、一貫性を備えた物語として立ち上がらせる。読者の注意は馬のセント・モアだけに向かいやすいが、田部井氏によるキー・イメージの捉え直しは、作中に散見される蛇のイメージを浮上させ、表面的に読んだだけでは見えにくい作品のメッセージを明確にする。

井上径子氏の「『社会的自己』の桎梏から解放放たれて——「太陽」試論」は、現代人と分裂した自己というロレンス作品に広く見られるテーマとも関連する「社会的自己」の桎梏からの解放という問題を、短い作品に込められた豊かな細部から浮かび上がらせていく。ボブ・カットという髪型の逆説的な意味、自らの姿を映す鏡の不在、脱人格化の過程、日光浴のモチーフなどが主人公の束縛とそこからの解放と結びついているという考察は、最終的に主人公がロレンス晩年の著作『アポカリプス』で描く生命観、宇宙観へと導かれていくと結論づけている。

最後の論文である藤原知予氏の「『ヴァージン・アンド・ザ・ジプシー』のイヴェットの持つ共感力——『フロス河の水車場』のマギーとの比較から」は、ロレンスの短編を他の作家の作品と結びつけ、その影響について論じている。藤原氏は、もともとロレンスはジョージ・エリオットの長編作品のマギーという人物に思い入れがあったことを指摘しつつ、特にロレンスがマギーから「肉体的共感」を読み取り、それが自身の作品のイヴェットという人物の創造の手がかりとなった可能性を提示している。

序において浅井氏が言及しているように、今日の短編小説の流行は、手早く情報を発信し、また手早く得ることが求められる風潮の中で、短編というジャンルがもつ「読みやすさ」がその要求を満たしやすい点にあるだろう。その意味で、短編というジャンルを扱った本書が、ロレンスの作品を未読の読者、特に長編には尻込みをしてしまう未読の読者にとって、ロレンスの作

品を読むための入りやすい入り口になるという意義は疑いえない。だが本書のさらに大きな意義は、短編というジャンル、そして読むという行為をめぐる問いを誘発させ、ロレンス研究における「ロレンスの短編を読む」ことの意味をも問い直したことだといってよい。それは短編というジャンルにとどまらない、ロレンス研究全体に及ぶ大きな達成にほかならない。

(井出 達郎)

近藤康裕『読むことの系譜学——ロレンス、
ウィリアムズ、レッシング、ファウルズ』
(港の人, 2014)

じつは決定的な意味をもった批評家たちが英文学研究という制度にあって然るべき注目も読解も受けずに埋没していることがある。その批評家たちに共通するのは、彼らが提示する「近代 modernity」に対する鋭利極まりない洞察である。思えば、近代文学を制度化した歴史性こそがこの「近代」であってみれば、その枠内（制度）内で「文学」研究をしている限り、定義上、みずからが生み出す言説の、あるいは、みずからが解釈するテキストの歴史性は死角となる。その不遇な批評家たちの名前を挙げれば、レイモンド・ウィリアムズ、ポール・ド・マン、そして、ジェフリー・メールマンということになるだろうか。ウィリアムズとド・マンに関しては、そのテキストが真剣に読まれることがないままに、それなりの知名度があるので、意外性はさほどないかもしれない。しかしメールマン、殊に『革命と反復——マルクス／ユゴー／バルザック』などという狂気じみた書物を「埋没」した必読書などと言え、個人的な経験からしても、北米の批評の最前線にいた米国人の研究者からすればほぼゼロに近い反応しかなかった。いずれにしても、文学研究の制度性に無自覚である限り、「近代」という問題系は視野から排除されつづけ、その盲目性の中で「文学」もじつは消失してしまう。所与の枠組みで文学研究をしている限り、文学それ自体が埋没してしまう。これは由々しき事

態ではないか。

本書は、ロレンスを読むウィリアムズを読むレッシングを読むファウルズというような「読むことの系譜学」を問うた研究である。この読みの連鎖はこの記述が示すようにならずしも直線的ではない。ウィリアムズの用語法で言えば、ロレンスを読むウィリアムズの言語が「残滓的なもの」として、レッシングとファウルズに読まれるプロセスを通じ、それが「ニュー・レフト」とも呼ばれる「(再) 勃興的なもの」として新たな可能性を帯びてくる——その批評性と歴史性を明晰かつ明敏に浮き彫りにしたのが本書である。じつは日本の英文学研究にあっても、ウィリアムズを「残滓的なもの」として読み抜くことで、新たな「読む(批評する) ことの系譜学」をもたらそうとする営為がすでに存在している。本書の文献表にある山田雄三『感情のカルチュラル・スタディーズ——『スクリュティニー』の時代からニュー・レフト運動へ』(2005年)がその嚆矢となり、これも本書が参照する高山智樹『レイモンド・ウィリアムズ——希望への手がかり』(2010年)がそれに続き、その系譜は、河野真太郎『<田舎と都会>の系譜学——二〇世紀イギリスと「文化」の地図』(2013年)、大貫隆史『「わたしのソーシャリズム」へ——二〇世紀イギリスとレイモンド・ウィリアムズ』(2016年)へと連なる(この時制は現在完了進行形である)。むろん、本書はまさに自己言及的にこの「読むことの系譜学」の必須の要素となった。

本書が「読みことの系譜学」と呼ぶことの内実を知る上で、鍵語は「関係」「解釈」「経験」「創造」である。ここで関係が意味するのは、近代による「公的(社会)」と「私的(文化)」の分断によってもたらされた「関係」であり、その分断性において文学=文化の非政治(歴史)化が所与の前提となる。レイモンド・ウィリアムズの『文化と社会』を想起するまでもなく、この意味での分断が「関係」という語の第一義となる。そして、この書物がまさに系譜学化した、近代による公/私という分断への抵抗の継続、本書の文脈では、ロレンスによって開始されたこの闘争と後の世代(ウィリアムズ、レッシング、ファウルズ)との関係性がつぎの段階で問われることになる。この「関係」を「解釈」という「経験」こそが、新たな文化を「創造」し得る。その可能性を「系譜学」的に析出するのが本書の目論みである。ウィリアムズの『長い

革命』を引用しながら本書は序論でみずからのヴィジョンを明示する。

では、文学的な実践において「経験にとって不可欠な能力」とは何を意味するのか？ また、「長い革命」の系譜のなかで、作家たちは先行する作家や批評家の仕事から何を継承してきたのか？ 『長い革命』でウィリアムズは、わたしたちがどのように現実を感受し、それにどう反応するかについて、根本的な考察をおこなっている。ウィリアムズは、「わたしたちが経験する現実」を「人間による創造」であるととらえ、「わたしたちのさまざまな文化によって遂行される解釈」という行為に着目する。わたしたちは世界の現実を「解釈」という行為をとおして「経験」し、現実を「創造」するのだという主張である。解釈と創造が同時に起きるとするのは、文学作品を読むことが同時にそれを創造することでもあるという文学の受容と創造のプロセスと類似している。ウィリアムズは、読むことと書くことという文学的な行為を「生のあり方」それ自体とみなしている。本論は、読むこと、書くこと、解釈、創造の相互関係が文化と文学を形成しているという洞察こそが、ロレンスからウィリアムズ、レッシング、ファウルズへとつながる系譜のなかで継承されてきたものであるということを論じていく。(16-17、強調はウィリアムズの原文、本文中にある頁番号等は省略)

本書がこの系譜を辿る際の最重要な準拠は「言語論的転回」以後の批評言語である。たとえばソシュールの記号論における記号の「関係性」をめぐる省察は、柄谷行人が読むマルクスを通じて、表象／代表の問題系に接続され、その水準で再解釈されたソシュールとマルクスの言語とロレンスのそれとの同時代的な間テクスト性が、第一章「価値評価、連続性、反復」においてじつにブリリアントに読解される。ここにおける「価値」は、マルクスの「価値形態論」あるいはジンメル『貨幣の哲学』との「関係性」において再定義されることで、それは「文学作品がもっているものではなく、文学作品が書かれ、読まれるという「交換」のプロセス」(36)として提示される。これは鮮やかなまでの明察である。そこにおいてジンメルが言う「心証」、マルク

スにおける「象形文字」、その読解困難性が示唆する「余剰」が新たな「関係」を結び、そこにおいて遂行される「解釈」は、ウィリアムズの言う「経験」と「感情構造」に接続される。じつに見事な系譜学的解釈による「創造」と言うほかはない。

第二章では、このような系譜学的読解の創造性は、ロレンスの「プロシア士官」と『羽毛ある蛇』における「生」「死」「エロス」をめぐる読解によって明らかになる「死の欲動」(フロイト)と「神的暴力」(ベンヤミン)とロレンスにおける革命表象の間にある同時代性の発見という形をとる。

第三章にあっては、ロレンス『海とサルデーニャ』を読むファウルズ『ダニエル・マーティン』という系譜において、「民主主義」が言語／政治の表象＝代表制、記号の意味論の恣意性といった問題系において根源的に問い直される。この言語論的転回以後の「表象＝代表」に関する考察は、言語唯物論的な視点をおのずと得ることにより、「下部構造」を経済的な「物質」としてのみならず、さらに「感情」の記述を可能にする言語という「物質」(118)というレベルを露わにし、その物質性においてロレンスとウィリアムズとファウルズという関係＝系譜がその姿を顕す。その観点から本書の白眉とも言うべき議論が導かれる。

「感情」と「物質」の問題が複雑に絡みあう歴史的現実には、これを表象の問題において考えるならば、テキストの意味生成の磁場となる「文脈」として機能する。したがって、ウィリアムズの議論は、由来その性質が恣意的である言語によって構築されたテキストとその意味決定という、表象の本質にかかわる議論でもあるということが出来る。この点に、ロレンス、ファウルズ、そしてウィリアムズに共通する問題認識を見出すことができるのだ。「感情」というキーワードは、文学と政治、テキストとその外部、上部構造と下部構造といった単純な二項対立を超えて、「物質的」な次元と「感情」の次元のいわば重層決定的な相互関係から社会を理解するというレベルのみならず、〔中略〕表象の問題と政治的な問題とを同列に論じることを可能にするメタ的な構造の相似性から、文化と社会を論じるレベルを提示することも可能にするのである。(118-19)

本書は、かくして、文学＝文化研究における悪しき近代の制度性たる「分離」と「分断」を「系譜学」的に再接続することを目指し、それに高水準で成功した、言語論的転回以後のマルクス主義的達成とみなすことができる。そしてその批評空間＝系譜学にあつて、ロレンス、ウィリアムズ、ファウルズ、レッシングの言語が交錯し合うことになる。

第五章ではこの「読みの系譜学」は、レッシングのメタ・フィクション性における「書き手と読み手、作者と世界、書く主体とテキストとのあいだの、穏やかならざる関係」(161)に着目しながら、そこに胚胎する恣意性が「テキストの余剰」(178)を生産し「偶然の結びつき」という可能性を孕むことを論じる。その論点は、ランシエールが探求する文学テキストに潜在する政治的可能性、つまりテキストが「それ自身がなすこと以上の何かをすることに深くかかわり、対象だけでなく感覚を、つまり、新しい感性的なものの分有をつくり出す」(174)潜在性と交差する。この読解はウィリアムズの「感情構造」の再解釈として非常に刺激的な視点を提供するだろう。

第六章は、ド・マンを参照しながら、言語の他者性と作家主体の不可能な関係性を「アレゴリー」と「倫理」という観点から再考し、その文脈でファウルズ『ダニエル・マーティン』における「幽霊」の隠喩が読まれる。このマルクス的でもある「幽霊」は、第五章の「余剰」と交わることにより、言語唯物論的な水準において、マルクスとド・マンという新たな「系譜学」を暗示している。ちなみに、ド・マンの死の直前のプロジェクトは『ドイツ・イデオロギー』の脱構築的な唯物論（修辞学）的な読解であった。

評者の関心からすれば、本書は、読むことと書くことの「行為遂行性」をめぐる議論でもあった。それは後期ド・マン、それを高水準で継承したショシャナ・フェルマンの「歴史」をめぐる批評を連想させ、さらにいえばフレドリック・ジェイムソンの「社会的象徴行為としての物語」という弁証法とも系譜学的な繋がりを持つ。いまわたしたちが遭遇、直面している「歴史」はいかなる事実確認的な記述をも逸脱する過激で粗暴なまでの恣意性＝言語行為性を露わにしている。その現在に介入、抵抗すべき文学＝文化研究の根幹には、本書が繰り返し強調する「読む」という営為の行為遂行性があるべきだ。

(遠藤 不比人)

D. H. ロレンス著、小野寺健・武藤浩史訳『息子と恋人』
(筑摩書房, 2016)

完訳本『息子と恋人』（翻訳底本は *Sons and Lovers*, Cambridge Univ. Press, 1992）が遂に出た。本邦初訳である。読后感想は「凄い！」の一言に尽きる。既訳に囚われない、練りに練られた、突き詰めに突き詰めた言葉で紡がれた歯切れのよい文のリズムに、思わずこれが翻訳であることさえ忘れ、『息子と恋人』の世界に浸り切っていた。森全体の景色がいい。そして、それはその中の木々の一本一本がしっかりとした存在感を持っているからであろう。

原著は、当時二十代半ばを過ぎた D. H. ロレンスという天才作家のペンによってしか書き得なかった偉大な作品である。我が国においても、昭和初年より、その翻訳は 5 種（部分訳を含めると 8 種、加えて映画版 2 種）を数え、その殆んど全てが、その後、出版社を変え、各種「文学全集」や文庫本に収められており、ロレンスの長編小説の翻訳としては、20 種近い『チャタレー夫人の恋人』に次いで、分厚い受容史を持つ。中でも、三笠→角川→河出（新社）と出版社を変え昭和 47 年まで刊行され続けた三宅幾三郎、清野暢一郎（分担）訳『息子と恋人』の発行部数は、戦前だけでおおよそ一万部にも上る。

さて、従来の翻訳は、編集者 E. ガーネットが「本の長さを気にして削除した」版、即ちダックワース社版（1913）や、ハイネマン版（1935）、ペンギン版（1948）等の原書を底本としたものであった。従来版とケンブリッジ版の優劣は別にして、E. ガーネットによる全体の十分の一、80 カ所に互っての削除・刈り込み（第一章～十一章）・検閲（第十二、十三章）箇所を全て、それにパンクチュエーションに至るまで綿密に検討・訂正し、復活させたケンブリッジ版刊行の意義は大きいし、ケンブリッジ版を底本とする初のこの翻訳書出版の意義は途轍もなく大きい。

まず、題名の『息子と恋人』は声に出しての納まりがいいし、いろいろな広がりを見せる訳語である。原題 *Sons and Lovers* を「母にとって息子は同時に恋人でもある」とする母の視点からの一般的解釈に肯きつつも、武藤氏は「父

にとつての愛しい息子」, 「息子がいて、それとは別に恋人がいる」として結婚前の母親と二人の恋人やウォルター・モレルとジェリー・パーディー、ポールとエドガー・リーヴァーズ及びバクスター間の関係等、更なる解釈をも提示する。我が国において、大正期は『息子と情人』『息子と戀人』『こども戀人』, 更に戦前までは『子供等と愛人』『子と戀人』『息子と愛人』『息子と戀人たち』『息子にして戀人』『息子達と戀人達』『戀息子』等々、今日まで続く邦訳題名が出尽くした感がある。本多顯彰は戦前、岩波文庫から第三巻まで出したが「無理解な当局」の発禁により中絶していた第四巻を戦後の昭和29年7月刊行。その「解説」(6月記、翻訳底本はセッカー版)の中で「“Sons and Lovers”は、あるいは、『息子たちにして恋人たるもの』と訳すべきかもしれない。(中略)しかし、見ようによっては、この作品は、息子たるウィリアムやポールをそれぞれの女の恋人としても描いているのであるから、『息子たちと恋人たち』と訳しても良いと思われる。作者はおそらく両義にかけてこの題を選んだものであろう」とし、昭和38年3月の同文庫改訳版の「解説」(昭和37年12月記)では、「この題名は、息子たちとその恋人たる女性たちという意味にも取れるが、また、夫に絶望した妻が、息子を恋人とするというエディパス・コンプレックスを描いたものとして、(母親の)息子にして恋人たるものたち、という意味に解することもできる」と変えてある。現在も『恋しい息子たち』も見られ、それらは各研究者の「読み」の所産であるから、優劣云々は言えないのは勿論である。

Mrs. Morelの訳一つとっても、小野寺健訳でもそうになっているが、「ミセス・モレル」が一番いいと思う。中島敦も、恩師澤村寅二郎の依頼で『息子と恋人たち』の下訳をしていた昭和8年11月13日付の、木村行雄宛て葉書で「Mrs. Morelは矢張り君の譯通り、ミシズ・モレルに致ませう。書き慣れ読み慣れて見ると、耳障りにもなりませんし、それに細君或はモレルの細君も時とすると冗長でピッタリ來ないことが多い」と記している(以降、現代語表記とする。頁数はケンブリッジ版)。如何に歯切れがよく、的確で細部まで行き届いているのか、全784頁のどこでもいい、無作為に選んだ訳文と原文を照合して見れば、それは一目瞭然であろう。

第一章、「月星亭」で父が給仕の手伝いをしていると息子から聞いた母の第

一声. “Hal’ exclaimed the mother, shortly” (p. 13). ①小野寺・武藤訳（平成28）「ふん！」母親が吐きすてた。（13頁。以下、①にのみ頁数を記す）②三宅幾三郎・清野暢一郎訳（昭和11）「ハア！」と母は短く叫んだ。③本多顯彰訳（昭和14）「はあ！」と母は短く叫んだ。④吉田健一訳（昭和25）「そんなことをしてるの、」と母親は叫んだ、⑤伊藤整訳（昭和35）「え！」と母親は短い叫び声を出した。⑥飯島淳秀訳（昭和43）「ふん。（後略）」と母はふきげんにいった。⑦小野寺健訳（昭和48）「ほんとう！」母親は不機嫌に叫んだ。

また、第八章の終り近く、父がボールに拳を上げる時の叫び声が①「ウッシャア！」父は低く叫ぶと（418頁）、と面白い（長崎でも「ヌーシャア！」と言う地方がある）。なるほど、原文も“—Ussha! hissed the father” (p. 253) で、音声そのままののだが、既訳は②「よいしょ！」と叱咤の聲を放って ③「ウシヤ！」と父は叫び、④「そら、」と ⑤「よし」と父親はうなり声をあげ、⑥「そら！」と父親は叫んで、⑦「それ！」息の下から言った父親は、となっていて、喧嘩の雄叫びとしては、①③以外は迫力に欠ける。

第十章, “His mother caught him on the raw of his wound of Miriam” (p. 299) は、①ミリアムという彼の泣き所を突いてきたのだ。（498頁）②ミリアムとの間の痛いところに触られたのである。③ミリアムから受けた彼の生傷にふれたのだ。④ミリアムが彼に与えた生傷に触れたのだった。⑤彼がミリアムから受けた生傷にふれた。⑦彼がミリアムから受けた傷手にじかにふれたのである。①が的確である。

従来版では削除されていた第二章の、ヒートン牧師が来ている時の夫婦の会話も “‘Drink less beer!’ Morel repeated. ‘Oh!—oh!—everything’s the beer! —A man happens to drink a glass, Mester Heaton, an’ he never hears the last of it’” (p. 48). 第二文は「おい！おい！——何でもビールのせいだ——つい一杯やっちゃまうとだね、ねちねちねちねち言われるんだよ、ヒートンさん」（71頁）と、その場にピッタリの訳だ。hear the last of ~「～の聞き納めをする」を never で打ち消しているから「いつまでも耳に残る」まではやれる、だが、もう一捻り、裏を返せば下線部のようになる。お見事！の一言しかない。

また、モレルだけが使う ‘a winder’ も、第三章初めでは “It’s a winder as we canna ha’e a sup i’ th’ouse.” (p. 61) 「なんで、あの菓を切らしてるんだ」（92

頁), 第六章 “Well, it’s a winder!” (p. 146) 「いや, こりゃあ驚いた!」(236 頁) と第八章 “That’s a winder.” (p. 220) で「いや, こいつあ驚いた!」(360 頁) と「なんで」と「驚く」が場に応じ使われている。「おったまげた!」が脳裏に浮かんだ。

第四章で, ポールが部屋で飛び降りの練習をする場面もそうだ. “Meantime Paul must practice jumping off the sofa arm” (p. 82) 中の “must” の訳語一つ決めるのにも悩むところだが, ①一方, ポールはソファの肘掛けから飛び降りる練習をしてみたくなった. (128 頁) ⑦そのうちに, ポールが(中略)練習のようなまねをする. ①⑦には, must の「はた迷惑なこと～」は無いが, 言外に理解できたような気になるから不思議だ. ③は他の4種と違い「するととんだことには, ポールがそのソファの腕から跳び下りの練習を始めた」と “must” が律義に訳されている.

第十章 “It did not matter to her that Miriam could not help it. Miriam did it, and she hated her” (p. 300). 下線部の訳. ①ミリアムにとっても避け得なかったということは問題にならなかった. (500 頁) ④それはミリアムの性格のためで, 彼女が別に悪気でそうしたのではないということは, モレル夫人にとっては言い訳にはならなかった. ④は付加が多い.

簡単な文だが様々な解釈のできる例を第五章から一つ. “Mrs Morel wondered, in her heart, if her son did not go walking down Piccadilly with an elegant figure and fine clothes, rather than with a woman who was near to him” (p. 116). ①ミセス・モレルは心の奥で, 息子は気持の合う女というより, きれいな服を着た美しい体とピカデリーを [[以下, 同様に省略] (185 頁) ②モレル夫人は, 心の中で, 彼女の息子が彼と同じような身分の女とではなしに, もしかすると売春婦とピカディリーを③モレルの妻は, 内心では, 彼女の息子が, 自分に近い身分の女とではなく, 垢^{あか}抜けのした, 美服^{まふく}を纏^{まと}うた女 (街の女) とピカディリーを④モレル夫人は, 彼女の息子が, 彼が本当に親しく出来る女ということよりも, いいなりをして, すらりとした姿でピカディリー通りを⑤モレル夫人は心の中で, 自分の息子が気持ちの合った女とではなく, 優雅な美しい着物を着たというだけの女とピカデリーを ⑥モレル夫人は, 自分の息子がいかがわしい女とロンドンの街を, ⑦ミセス・モレルは,

心中、息子が気持の合う女というより、服装のいい美人をつれてピカデリーを、・・・訳し過ぎ感のある②③⑥をも考慮した①が穏当な訳だ。

難解な方言の訳も違和感がなく生き生きとしている。しかも、万人に分かる穏当な方言訳になっていて、言葉がスーッと入ってくる。例えば、第八章の“‘Strewth!’ he said. ‘Tha’s niver knowed me but what I looked as if I wor goin’ off in a rapid decline.’ (p. 236) の下線部訳は、①「ほんとの話だ！」(中略)「おまえは、どんどん弱りはじめてっからのおれっきゃ、知らねえじゃねえか」(387頁)とある。各種訳は、②「お天道様が見てらあ！お前だって昔から知ってるぢゃねえか。俺がどんどん痩せ衰えて行くこたあ」③「何だって！」(中略)「お前は、おれの、どんどん衰えてゆきそうに見え始めた体のほかは知らないはずだぜ。」④「何言ってるんだ。俺はお前に会ったときからもう、いつ死ぬか解らないような体だったんだ。」⑤「なに」(中略)「おまえなんか、どんどん痩せ衰えだしてからのおれしか知らないんだ」⑦「ほんとの話さ！」(中略)「おまえは、どんどん弱り出してっからのおれっきゃ知らないじゃねえか」となっている。

また、第十章でクララが自宅の墓の中のような客間をやめて、ポールを台所に案内する場面では「諺」が出る。“But she might as well be hung for a sheep as for a lamb” (p. 301) ①「だが、こうなれば、彼女としても何を見られようと五十歩百歩だった。」(502頁) ②彼女はこんなひどい部屋に招じるよりは死んだ方がましだと思ったので、③しかし彼女は仔羊を盗んで罰せられるくらいなら、いっそのこと羊を盗んで罰せられた方がましだと思った。④しかし彼女としては、もうポオルに來られてしまった以上、どうした所で大した違いはなかった。⑤しかし、彼女はどうせ家を見られたのなら何もかにも見せようという気持ちになっていた。⑥こんな客間よりも、まだしも台所の方がましだと思ったのだろう。⑦しかし、こうなれば、<以下①と同じ>。①④⑤⑦が、文脈にピッタリだ。

ところで、“quickly”も「あとがき」で“the quick and the dead”を例示し、「生きている」という含みがあるとされるのも説得力がある。この語もまた意識して用いられているように思う。というのも、第十三章の終り近く、病状が好転しないままシェフィールドのアニーの家から帰宅する母親が「誰の目

にも彼女が死に向かいつつあるのが」明らかであるにも拘らず、「はしゃぐ」場面でも quick が使われているからだ。“Her eyes were so quick, she was still so full of life” (p. 422) (ハイネマン版は「,」ではなく「;」である). ①⑦彼女は目ざとかった. ①まだ命があふれていた. (712頁) ⑦彼女はまだ生命力に溢れていた. ②彼女は目が早かった. まだ元気一杯だった. ③彼女の眼はそれほどざとかった. 彼女はまだ生気に満ちていた. ④彼女はいつもと少しも変わらず眼が早くて, そして見るからに生き生きしていた. ⑤彼女の目はとてもすばしこかった. 彼女はなおも生命に満ちていた. 翻訳し難いが, 確かに「生」を感じさせる語である. 最終章(第十五章)最後の文, “He walked towards the faintly humming, glowing town, quickly” (p. 464) の quickly の訳には, ①きびきびと(784頁) ①白河次郎訳註(『上級英語』第一卷十号, 大正16年『昭和2年』1月1日)足速に②③⑦足早に④急ぎ足で⑤足ばやに ⑥足をはやめた. 単なる速度ではなく「生」の躍動も含蓄する①がいい.

もう一つ, ロレンスが意識的に言葉を選んだと思える例は whimper で, 第一部と第二部の最後で見られる. 前者(第六章)は, 長兄ウィリアムを失い悲嘆にくれる母に, ポールが呼びかける場面. ‘Oh (.) my son—my son!’ Mrs (.) Morel sang softly. And (softly, and) each time the coffin swung to the unequal climbing of the men: / “Oh (.) my son—my son—my son!” / ‘Mother!’ Paul whimpered, his hand round her waist. / ‘Mother!’ (ハイネ版には無し) [p. 169:()内はハイネマン版 p. 139] ①泣いた. (276頁) ②泣きながら言った. ③しくしく泣いた. ④小声で言った. ⑤すすり泣いた. ⑦ささやいた. 後者(第十五章)で “whimper” が使われているのは, “So much, and himself, infinitesimal, at the core a nothingness, and yet not nothing. / ‘Mother!’ he whimpered, (whispered—) ‘mother!’” (p. 464; ハイネマン, p. 420) の箇所である. 従来版では “whispered” が使われていた(しかし今回, 最終章後半部だけとは言え, 我が国最初の註釈である①でも, また1913年のセルツァー版に依拠した1953年8月刊のペーパーバック *Signet Book* でも, 何と “whimpered” となっているのを発見し, ケンブリッジ版で初めて復元されたと思っていただけに, 驚いた). その訳は①「啜り泣いた」(98頁) ①「泣き

出しそうだった」(784頁)となっている。従来版に依拠した既訳を見ると、②すすり泣くように言った。③⑤ささやいた。④低い声で言った。⑥ささやくようにいった。⑦つぶやいた。

最後の2頁に多く出る描出話法の訳も的確だ。“He would destroy himself like a perverse child. Well then, he would!” (p. 463) ⑩彼はねぢけた子供のよう^ににその身を亡ぼそうと欲していた。そうだ、その時は欲していたのである。①この人はつむじ曲りの子供みたいに自滅の道をたどるだろう。それなら、放っとけばいい！(781頁) ⑦この人はつむじ曲りの子供のよう^にに、自分で自分をだめにしてしまうだろう。それなら、それならそうすればいい。“But no, he would not give in” (p. 464) の訳は、⑩併し否、彼は参ってしまおうとはしなかった。①いや、ほくは屈しない。(784頁) ②いや、それではならない。彼はへばってしまいたくなかった。③だが、だが、彼は参るまいと思った。④しかし彼は、まだ負ける積りはなかった。⑤しかし、いいのだ。彼は降参したくなかった。⑥だが、いけない、負けてはいけないと思った。⑦しかし、それは違う。屈服してはならない。等とあり、夫々訳者の個性が出ている。

さて、生原稿通りのパンクチュエーションの復活がなされたことで、意味合いが異なった例を一つ。第十二章で、従来版は“Perhaps it was essential to him_{as} to some men_{to} sow wild oats” (ハイネマン, p. 318) であり、ケンブリッジ版は“Perhaps it was essential to him—as to some men to sow wild oats” (p. 362) となっている。従来版訳は、②恐らく彼にとって、人によってはそうであるように、どうしても若気の放蕩をせずにはいられないのかも知れない、③若気の過ちを犯すということは、ある人々に必要なように、たぶん彼にも必要なのであろう。④あるいは、他のある種の男達にとってと同様に、彼にも放蕩が必要なので、⑤ある種の男たちのように、たぶん彼にも若気^{わかげ}の道楽が必要だったのだ。⑦おそらく、彼も、ある型の男の例に洩れずどうしても放蕩を避けて通ることができないのだ。完訳版で①「ある種の男が放蕩を避けて通れないのと同じことかも知れない。」(608頁) となっている。従来版では it は to 以下、即ち「放蕩をすること」が或る種の男たちにもポールにも必要であることを意味する。ダッシュ付きのケン版では、it は前文にある “a sort of baptism of fire in passion” (情熱の火の洗礼、のようなもの) を指す。

それがポールにとって必要なもので、或る種の男たちには「放蕩をする」の
が必要だと読める。但し、必ずしもパンクチュエーションの違いで、即、訳
に差が出るものでもないというのは勿論である。

今、読後感想を書いている私の手放しの賛辞に対しては、「熱愛中の恋人の
ように、痘痕も笑窪に見えているのでは？」と、批判もあろう。「諸刃の剣」
であるが、幾つか気になったものがなかったわけではない。例えば 640 頁 14
行目の「増しみ」は「憎しみ」であろう。第九章 “Miriam brooded over his
split with her” (p. 268)。「ミリアムは、ポールとの別れを考えつづけた」(444
頁)の下線部は「ひび・不和」であろう。第一章で「谷底」の家の台所から
見えるのが裏庭と ash-pits (p. 10) とある。これを「灰捨て穴・ごみ捨て場」
だと、ずっと思い込んでいたが「(汲み取り式) 便所小屋」(8 頁) とは、驚く
と同時に疑問のままである。

第十四章で、母の遺体をきちんと見る事もせず事務的に扱う葬儀屋をポー
ルが見守っている場面。“He watched jealously” (p. 443). ①ポールは彼らを嫉
妬深く見つめた。(749 頁) 下線部は②⑤の「油断なく」か、と思った。③猜
疑の目で④母親に対して失礼がないように、彼らがしていることから一瞬も
眼を離さずにいた。⑦たえず目をくばっていた。

また、第十章のクララの家の客間に通されたポールが目にするのは “deathly
enlargements of photographs of departed people, done in carbon” (p. 301)
である。①故人となった家族の陰気な炭素写真 (501 頁) ②炭素写真法で描い
た故人の不気味な引伸ばし写真③炭素写真法で引き伸ばした故人の写真④昔
の人間の写真を炭素写真に拡大したのが、⑤亡くなった人たちの、写真から
カーボンで大きく描き直した死人のような顔つきの肖像⑦故人となった家族
のばかりでかい炭素写真、等々。①では「引伸ばし」の意味が欲しかった。

他に “By this time” (p. 300) や “seemed” (p. 454) の訳し落としがあるが、
新美南吉もロレンスの短篇訳の推敲段階で、故意に “seems” を抜かしていた
のを思い出した。

第十一章の初め、“They preferred themselves to suffer the misery of
celibacy, rather than risk the other person” (p. 323) 下線部は①他者という
危険に賭けるくらいなら、(540 頁) とあるが、「他者を傷つける恐れのあるこ

となど止めて(他人を傷つけるという危ない橋を渡るよりも)」かな、と思った。

第十五章初めの“There seemed no reason why these things should occupy the space, instead of leaving it empty” (p. 454) で、①空間を占めるのが虚無ではなくてこれらの事物である理由も無いように思えた。②どうして空間というものが奇麗さっぱりとしていないで、そんなものがごちゃごちゃと場所を塞いでいなくちゃならないんだ。③これらのものが、空間を空けておかないで、それを満たしている理由がないように思えた。④そういうものが空間を占めていることに就いては、何の理由もないように思われた。⑤このようなものがそこに立ち、空間をうずめなければならぬ理由などないように思われた。⑦なぜ、ただがらんとした空白でなく何かがそこになければならないのか、その理由がわからない気がした。①の「虚無」は訳し過ぎかと思った。

第十五章の“But why there should be the noise of speech he could not understand” (p. 454) は、①言語と呼ばれるノイズがどうしてあるのか、(767頁) ②言葉という騒々しいものがどうしてなくてはならないのか——③なぜ言葉の聲があるのか、④何故人がものをいったりするのか、⑤単なる音にすぎず、彼には理解できない言葉などというものが、なぜあるのだろう。⑦なぜ声がしなければならぬのか、等と訳されているが、堅苦しい「言語」より「^{かしま}姦しい話し声」かな、と思った(これまた重箱の隅である)。

本書に驚くほど多く出てくる花々の植物名に関しては、英語は一つだが訳書によって様々(celandine クサノオウ, きんぼうげ; sweet william アメリカ撫子, ヒゲナデシコ; pink ナデシコ, 石竹; champion センノウ, せんおう, カミツレ)で、正直言うと、その多くが実物と結びつかず、もっと知識があれば情景の映像化もできたと思うのだが残念である。第十五章初めの箇所、“The first snowdrops came. He saw the tiny drop-pearls among the grey” (p. 454) の訳は、①⑦スノウドロップの花が咲きはじめた。彼は灰色の世界にぽつんと咲いたスノウドロップの小さな白い花を眺めた。(767頁) ②初雪が降って来た。彼は灰色の中に小さな真珠のような雪を見た。③最初のまつゆき草が現われた。彼は灰色の中にその小さな真珠の玉を見た。④その年の最初のスノウドロップが咲き始めた。灰色の背景に小さな、白い、吊り鐘型の花が開いたのを彼は見た。⑤最初のスノードロップが咲いた。彼は灰色の

中に小さなドロップパールを見た。②は誤訳で、⑤はもう少し訳語の突き詰めが欲しい。“snowdrops”を「スノードロップ、マツユキソウ、ユキノハナ」とするのに迷うところである。

我々シルバー世代が、嘗て一番親しんだ④は、付加が多く（時に、すっぱかし訳もある）、原文を見なければ「読者ファースト」に思える。また、⑦は緻密である。他訳に目を向けると、heをsheと、lambをlumpと勘違いしたための、イディオムを間違ったための訳などがあって一長一短であるが、どの訳本も、各訳者のこの作品を紹介しようという熱意の伝わってくるものばかりであるということは強調しておきたい。だが、小野寺健・武藤浩史氏によるこの完訳本は、選び抜かれた読み易い日本語といい、誤訳の少なさといい、従来の諸翻訳の中でも飛び抜けて秀逸なものに思われた。

ところで、武藤浩史訳の『D. H. ロレンス幻視譚集』（平凡社、2015）が、本書出版の5カ月前に出た。「幻視譚集」と呼ぶに相応しい作品ばかりが訳載されていて、これまた再読し、感銘を受けた。今後、シリーズで、例えば「ロレンス教育論集」など続刊が欲しいと思った。ともあれ、これら二冊の訳書は、ロレンス研究者、これからロレンスの研究を志している方、翻訳の勉強を試みようと考えている方の良き指針となることは絶対に間違いない。一読をお勧めする。

（増口 充）

ロレンス研究文献

(2015年9月～2016年8月)

(日本在住の研究者あるいは国内出版の英語文献)

Asai, Masashi, (論文) “How to Have Meaningful Relationships with the Other: Lawrence, Sade, and Bataille”, Simonetta de Fillips (ed.) *D. H. Lawrence: New Critical Perspectives and Cultural Translation* (Cambridge Scholars Publishing), August 2016.

Hoshi, Kumiko, (論文) “D. H. Lawrence and Hannah Höch: Representing Einstein and the Post-World War I World”, *Études Lawrenciennes* 46, 2015.

Iwai, Gaku, (論文) “Wartime Ideology in “The Thimble”: A Comparative Study of Popular Wartime Romance and the Anti-romance of D. H. Lawrence”, *Études Lawrenciennes* 46, 2015.

Kondo, Yasuhiro, (論文) “Work and Identity in the Foreword to *Sons and Lovers*: D. H. Lawrence’s Critique of the (Post) Modern”, 『慶應義塾大学日吉紀要・英語英米文学』第67号(慶應義塾大学), 2015年12月.

Nakayama, Motofumi, (論文) “D. H. Lawrence’s ‘Tenderness’”, 『宮崎公立大学人文学部紀要』第23巻第1号(宮崎公立大学), 2016年3月.

(日本語文献)

浅井雅志, (論文) 「『愛情的世界内存在』を求めて——「プロシア士官」論」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.

麻生えりか, (論文) 「『虹』批評と現代社会——石炭とダイヤモンドと工兵と」, 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.

荒木正純, (書評) 「Matthew J. Kochis and Heather L. Lusty (eds.), *Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence*」, 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.

- 飯田武郎, (論文)「ロレンスとシンマクス」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 石原浩澄, (論文)「文学批評と公共圏——「牧師の娘たち」を読むレビュー」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.
- 板谷洋一郎, (書評)「D・H・ロレンス, M・L・スキナー『ユウカリ林の少年』」, *New Perspective* 47 (1) (新英米文学会), 2016年.
- 伊藤芳子, (共訳)クスト・メリル『一人の詩人と二人の画家——D・H・ロレンスとニューメキシコ』(春風社), 2016年4月.
- 井上径子, (論文)「「社会的自己」の桎梏から解き放たれて——「太陽」試論」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.
- 岩井学, (論文)「指貫を葬り去ることはできるか」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 岩井学, (論文)「労働者階級の肉体に映し出される中産階級の恐怖心と羨望——「牧師の娘たち」, 「ヘイドリアン」, 後期エッセイに見る階級観の変遷と相克」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.
- 有為楠泉, (論文)「D・H・ロレンスの自然とコスモス」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 有為楠泉, (論文)「氷柱の向こう側——「馬で去った女」の射程」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.
- 遠藤不比人, (論文)「情動化/攪乱される有機体論」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 大田信良, (論文)「功利主義の伝統と「英文学」のなかのロレンス」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 大平章, (論文)「ロレンスの教育論」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 大平章, (論文)「D・H・ロレンスの小説における『ユウカリ林の少年』の重要性」, *Transcommunication* 3 (1) (早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科), 2016年3月.
- 岡山勇一, (書評)「倉持三郎, 『D・H・ロレンスの大学ノート:内容と解説』」,

- 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.
- 加藤彩雪, (論文)「オーストラリアのブッシュ文学とロレンス——『カンガルー』における自然描写と共同体」, 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.
- 加藤洋介, (論文)「『息子と恋人』の暗闇を読む」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 木下誠, (論文)「インダストリアル・アートとしての絵画」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 木村公一, (共訳)クヌド・メリル『一人の詩人と二人の画家——D・H・ロレンスとニューメキシコ』(春風社), 2016年4月.
- 倉田雅美, (書評)「D・H・ロレンス研究会篇『ロレンスへの旅』」『英文學研究』第92巻(日本英文学会), 2015年12月.
- 倉田雅美, (共訳)クヌド・メリル『一人の詩人と二人の画家——D・H・ロレンスとニューメキシコ』(春風社), 2016年4月.
- 倉持三郎, (論文)「チャタレイ裁判の有罪判決とムヌース神学校への補助金問題」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 倉持三郎, (資料)『D・H・ロレンスの大学ノート: 写真版』(光陽社出版), 2016年2月.
- 小林みどり, (論文)「D・H・ロレンス思想と老荘思想における共通点」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 駒村圭吾, (論文)「ロレンスからサドへ」, 『自由の法理: 阪本昌成先生古稀記念論文集』(成文堂), 2015年10月.
- 近藤真理, (論文)「ロレンスの意図: 中編小説『太陽』から」, 『大学院紀要』第52号(東洋大学大学院), 2015年.
- 鈴木俊次, (論文)「D・H・ロレンスと植物学(生物学)の出会い」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 鈴木俊次, (論文)「ロレンスにおける父・身体・触覚」, 名古屋大学英文学会編『英米文学における父の諸変相——安田章一郎先生百寿記念論集』(英

宝社), 2016年4月.

鈴木俊次, (コメンタリー)「ワークショップ: D・H・ロレンス『虹』を読む——その総合コメントとして」, 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.

高村峰生, (論文)「触覚的な暗がりのほうへ——D. H. ロレンスの *Sketches of Etruscan Places* における古代エトルリアとイタリア・ファシズム」, 『英文學研究』第92巻(日本英文学会), 2015年12月.

田部井世志子, (論文)「馬ではなく, 蛇が……——「セント・モア」におけるキー・イメージ」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.

田部井世志子, (論文)「機械文明を告発する『虹』——蛇の表象を巡って」, 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.

中林正身, (翻訳)『作家ロレンスは, こう生きた』(南雲堂), 2015年11月.

中林正身, (論文)「ロレンスは猥褻な作家か?」, 英米文化学会編『英米文学に見る検閲と発禁』(彩流社), 2016年7月.

橋本清一, (論文)「イタリアに於ける D・H・ロレンスの足跡を巡って」, 『経済研究』第8号(青山学院大学経済研究所), 2016年3月.

ハリソン, ジョン R., 加藤英治訳, (論文)「反動主義者としてのロレンス」, 『基礎科学論集・教養課程紀要』第16号(神奈川歯科大学), 2016年4月.

巴山岳人, (論文)「『白孔雀』における啓蒙, 美学, そしてエリート主義」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.

巴山岳人, (論文)「生の力としての電気——D. H. ロレンス『恋する女たち』における物質とエネルギー」, 『文学と環境』第18号, 2015年10月.

巴山岳人, (論文)「D・H・ロレンス『虹』における生命, 物質, そして個性」, 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.

藤原知予, (論文)「『ヴァージン・アンド・ザ・ジプシー』のイヴェットの持つ共感力——『フロス河の水車場』のマギーとの比較から」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.

星久美子, (書評)「Nick Ceramella (ed.) *Lake Garda: Gateway to D. H.*

- Lawrence's Voyage to the Sun*], 『D. H. ロレンス研究』第26号(日本ロレンス協会), 2016年3月.
- 三宅美千代, (論文)「D・H・ロレンスとハーレム・ルネサンス」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 増口充, (論文)「D・H・ロレンス著, 新美南吉訳「すみません切符を」について」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 松本朗, (論文)「田舎の日常性とモダニズム——ロレンスとオーウェルの<牧師の娘小説>」*Metropolitan* 58(首都大学東京), 2016年.
- 武藤浩史, (翻訳) D. H. ロレンス『D. H. ロレンス幻視譚集』(平凡社), 2015年9月.
- 安尾正秋, (論文)「ロレンスの書簡における「未来派」観」, 中国四国イギリス・ロマン派学会編『詩的言語のアスペクト——ロマン派を超えて』(松柏社), 2016年6月.
- 山田晶子, (論文)「イギリス, 私のイギリス」, 日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会), 2015年10月.
- 山田晶子, (論文)「「春の亡霊たち」論——メラーズの前身としてのサイスン」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.
- 山本智弘, (論文)「「桜草の道」とオーストラリア——アイデンティティーの揺らぎ」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.
- 横山三鶴, (論文)「娘に託された奇跡——「馬仲買の娘」における再生の意味」, D・H・ロレンス研究会編『ロレンスの短編を読む』(松柏社), 2016年1月.

日本ロレンス協会第47回大会報告

2016年度の日本ロレンス協会第47回大会は、松山大学にて6月11日（土）、12日（日）の両日に開催された。第1日目は、会員2名による研究発表、そして会員以外の講師も招いてのシンポジウムが行われた。その後に総会と懇親会が開催された。第2日目はワークショップが開催され、前日に続きフロアとの活発な議論が執り行われた。なお役員会は大会初日の午前中に開かれた。

第1日 6月11日（土）

【研究発表】

The Plumed Serpent——ケイトの攻撃性から見る愛と承認欲求のプロット

大山 美代（広島大学大学院博士課程後期）

本発表では、*The Plumed Serpent*の主人公ケイト・レズリーの持つ攻撃性について考察した。作品におけるロレンスの思想性ばかりを重視してきた過去の研究は、ケイトというキャラクターを、ただ変化することを強いられる受動的存在としてみなしてきた。しかし発表では、西洋的な自我を持ち続けるべきか、メキシコ的な女になるべきかという分裂の苦しみを、ケイトが自らに課すかのように何度も繰り返していることを指摘し、自分自身へと向かうその攻撃性を「死の欲動」論によって読み解いた。

前夫ジョアキムと死別した後のケイトは、世俗的な愛や接触をもはや必要としなくなったと豪語していた。しかし、実は孤独には生きられず、自分を必要としてくれる男を求めている、という自己矛盾への自覚は、彼女自身の生すらも脅かすほど激しい、目的なき怒りとして表れている。そしてその攻撃の欲動の源泉には、物語において語られないドン・ラモンへの愛と、彼に愛されたいと願う承認欲求が存在していることを論じた。さらに、ケイトがラモンにジョアキムの姿を重ねていることを指摘し、彼の愛と死を反復することによって彼女は古い西洋的意志にいつそう強く縛られ、それが自我の放棄への抵抗へと繋がっていることを明らかにした。しかし、後妻であるテレサの出現によって、愛の挫折と女としての敗北を経験したケイトは、自らのアイデンティティを求めて葛藤し、自己攻撃の

反復をさらに加速させる。

このように展開されるメロドラマティックな愛憎劇のプロットを焦点化することによって、これまで軽視されてきた *The Plumed Serpent* の小説としての価値を見出すことが本発表のねらいであった。攻撃性という人間の本能的な自己主張によって、物語の終わりに至るまで愛と承認を求め続けるケイトの自我の強さを論じることで、登場人物が生命感を欠き、ロレンスの思想の代弁者となっているという作品批判に対する反論とした。

「知のステータス変化」

——D. H. Lawrence と Iris Murdoch 作品における言語機能の比較

角谷 由美子（神戸女学院大学非常勤講師）

ポスト構造主義者 Jean-François Lyotard は Ludwig Wittgenstein の言語ゲーム理論を用い、著書『ポストモダンの条件』（1979）において「1950年代終わりのポストモダン時代に入ると同時に知のステータスにも変化が生じる」と主張した。本発表では、この「知のステータス変化」による文学への影響を D. H. Lawrence と Iris Murdoch の作品を比較分析しながら考察した。

ヴィトゲンシュタインの「言葉や思想はその時々文脈から分離することは出来ない」という理論を前提にロレンス作品における言語ゲーム成立の可否を検証。小説家を「一種の現象学者」として捉えるマードックの *Severed Head* (1961) とは対照的に、*Lady Chatterley's Lover* (1928) では、あえてロレンスは語れないものを語ろうとしている。発表後半では1950年代に再燃したイギリスの演劇とリアリズムブームにより60年代、次々に舞台化された *Lady Chatterley's Lover* の脚本を取り上げ、ロレンスの「知」が後世にいか「翻訳」されたか分析。20世紀中頃に生じたとされる「知のステータス変化」とは、一つに本来の言語機能を回復させる作業を意味したのではないかと結論付けた。

【シンポジウム】

マモン神に抗って——モリス、ロレンス、オーウェル

司会・講師 木下 誠（成城大学准教授）

ロレンスと社会信用論（Social Credit）

——キボ・キフト、ダラムの炭鉱労働者たち、詩集『三色すみれ』

講師 木下 誠（成城大学准教授）

社会信用論とは、第一次世界大戦後にクリフォード・ヒュー・ダグラスが提唱した経済理論である。ダグラスはこの理論で金融資本主義を批判しており、大恐慌を挟んだ1920年代末から30年代にかけて多くの作家や知識人が関心を向けた。ロレンスも一定の理解・共感を示したひとりだった。本発表では、ロレンスと社会信用論の関係について2つの導入口からアプローチした。ひとつは、ロルフ・ガーディナーに勧められて読んだ、ジョン・ハーグレイヴによる『キボ・キフトの告白』（1927年）。もうひとつは、ロレンスが1908年前後にノッティンガムで購読していた文芸週刊誌『ニュー・エイジ』。金融資本主義批判の社会信用論はジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの思想を受け継いだギルド社会主義の流れにあることを確認し、『チャタレー夫人の恋人』における産業社会批判や拝金主義批判の歴史的意義を、キボ・キフトの「真っ赤なズボン」への言及を経由して、フェビアン協会やいわゆるニュー・リベラリズムではなくてギルド社会主義の方面から捉え直す可能性があるのではないか、と示唆した。

ゴードン・コムストックの金銭感覚

——George Orwell, *Keep the Aspidistra Flying* (1936) における拝金主義批判

講師 福西 由実子（中央大学准教授）

ジョージ・オーウェルの3作目の長編小説である *Keep the Aspidistra Flying* は、オーウェル自身が1934年10月から36年1月までロンドンのとある書店で店員として働いた経験から生まれた作品である。主人公のゴードン・コムストックはある意味オーウェルの分身といえるが、没落したミドルミドルクラス出身で、詩作に没入し階級の底辺を経験するために、収入の安定した広告会社を辞め、ロンドン場末の貸本屋の店員となる。やがて生活に困窮し詩作は滞り、ゴードンの独白は、

金銭にまつわる文言で埋めつくされていく。

恋人の妊娠を機に、ゴードンはこれまで書き溜めた詩の習作の束を下水溝に棄て、決別したはずの広告業界へと戻っていく。小説の結末で彼が新居の窓辺に飾ろうと恋人に提案するのが、ロウワーミドルクラスの象徴ともいべき「葉蘭」である。

本報告では、作品中に散りばめられた収支の記録や拝金主義批判に注目し、これをゴードンの勤務する貸本屋に出入りする様々な階層の客や、店の書架に並ぶロレンスの詩集をはじめとする実に雑多な書籍、作品のモチーフとして繰り返し描写される葉蘭に読み取れる同時代の趣味（テイスト）の問題と関連付けながら、オーウェルがなぜゴードンに、最終的に「金の世界」への回帰——すなわち、詩的ヴィジョンとマスメディア広告との間で折り合いをつけること——を選択させたのか、その生産的な意味を探った。また、マス・オブザーヴェイション運動の創始者チャールズ・マジの詩作運動との関連、さらに、本作をインターモダニズム小説として読みなおす可能性についても言及した。

ポール・モレルの「レッサー・アーツ」

——ウィリアム・モリスからD・H・ロレンスへ

講師 川端 康雄（日本女子大学教授）

ロレンスの晩年のエッセイ「ノッティンガムと炭坑のある田園地帯」（1930年）のなかで、ヴィクトリア朝における富裕層と産業推進者の「大罪」——すなわち労働者たちを貶めて「醜悪」な環境や人間関係へと追いやった罪——を糾弾しているくぐり、芸術創造の観点から産業主義を批判した工芸家ウィリアム・モリス（1834-96年）の「レッサー・アーツ」の思想がロレンスに直に流れ込んでいることを証す発言であるように思える。じっさい、ロレンスの小説作品には装飾芸術への関心が顕著に見られる。『息子と恋人』でポール・モレル青年は事務職のかたわら絵画修行に加えデザイン制作に励み、リバティ商会に自作のテキスタイル・デザインを供給する。絵付も学ぶ。

モリスの芸術論および社会主義思想は、先人のカーライルやラスキンの思想とともに、20世紀に入って（特に第一次大戦以後）モダニズムの興隆を契機に忘却されたとする見方が少し前まで支配的だったが、それはいま修正されつつある。

本発表では、ラスキン、モリス、アーツ・アンド・クラフツ運動からロレンスまで、いかなる系譜が考えられるのか、そしてその系譜にいかなる意義を見出せるのかを、『息子と恋人』を主たるテキストとして考察した。

第2日 6月12日(日)

【ワークショップ】

ロレンスと短編——短編というテキスト空間における他者表象

司会 岩井 学(熊本保健科学大学准教授)

D・H・ロレンスの作品と聞くと、多くの人は『息子と恋人』、『虹』、『恋する女たち』あるいは『チャタレー夫人の恋人』といった長編を真っ先に頭に思い浮かべるのではないだろうか。しかしロレンスは、未完を含めると80近くの短編を著し、短編作家としての力量も評価されていることを忘れてはならない。近刊の『ロレンスの短編を読む』(松柏社)において浅井雅志氏は、「長編では生の主要問題を対話的手法を用いて……掘り下げていくが、短編では……彼の最大の特徴であり武器でもある」彼独特の文体や「自己思想の深化」が十分発揮できないのではないかという疑問を呈している。本ワークショップでは、この問題提起を足がかりに、中林正身氏、横山三鶴氏そして井出達郎氏に登壇いただき、三氏の問題提起を足がかりにフロアを含めた活発な議論が展開された。

作家ロレンスと短篇小説

講師 中林 正身(相模女子大学教授)

作家ロレンスは自分の執筆活動によって、フリーダとふたりで食べて生きていくための生活費を稼がなくてはならなかった人間ロレンスでもあった、という事実について考えてみた。生きていくために収入を得ねばならず、収入を得るためには執筆して出版しなければならなかったベストセラー作家として成功したとは決していえないプロの作家且つ人間としてのロレンスの姿——ロレンスのプロフェッショナルリズム——を少しでも浮き彫りにしてみたかったからである。ロレンスの書簡を眺めると自分の作品の出来不出来や売れ行きをかなり気にしたり、エージェントや出版社が商業的に自分の作品にどのように反応するかを気にしていたことが窺い知れるし、執筆にいつも追い立てられていたという印象は伝わ

てこないで案外気ままな執筆生活を送っていた部分もあったのではないかという気もするのだ（his [Lawrence's] writing was not just writing as a profession」とはフリーダの言葉である）。作家としての使命感もあったのだろうが、同時に稼ぐことを念頭に置いて作家として生きていたという側面もあるのではないか——そんなロレンスの姿を垣間見ることができればと思った。

「眠り姫」物語の系譜における

「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」をめぐる

講師 横山 三鶴（甲南大学非常勤講師）

今回の発表では、「眠り姫」のモチーフを持つ一連の小説群に注目し、その系譜の中で、これら中期の短編小説はどのように位置づけられるのか、また、ロレンスはなぜこのモチーフを繰り返し採用したのか、という点について考察した。

戦時に執筆された「馬仲買の娘」は、娘の再生をテーマにした作品であると同時に、奇跡的な「接触」の重要性を強調した作品である。家という閉塞的な空間、静止した時間に閉じ込められている娘がある種の「眠り」の状態に陥らせ、他者との「接触」による「目覚め」へと導くプロットの展開は、3年後に執筆された「ヘイドリアン」とも共通する。しかし、目覚めたのは娘だけではなかった。ロレンスは、他者との関係性を描く上でこのモチーフを採用しながら、あえて、触れる側と触れられる側、目覚める側と目覚めさせる側の境界を曖昧にし、幸福なはずの結末に捻りを加え、越えるべき境界を変容させることで、物語をより一層重奏的にしている。

「馬に乗って去った女」「鳥を愛した男」「死んだ男」における

固有名の喪失と他者の歓待

講師 井出 達郎（東北学院大学准教授）

標題に挙げたロレンス後期の三つの短編は、“The Man/Woman Who …”という構文を用いたタイトルのもと、共通して固有名の喪失というべき事態を描いている。本発表では、三つの短編からこの固有名の喪失を共通したモチーフとして拾い上げ、それを他者の歓待という主題から読み、その読みの可能性を探った。もともとロレンスは、自身の言葉でいう「移動への絶対的希求」によって、自らが

移動して他者に会いに行くという出来事を繰り返し描いてきたと言える。しかし、旅行記や長編作品において、その「長さ」に伴う大きな時空間の移動を通して出会う他者は、単にロレンス自身の理想をロマンティックに投影したものでしかないのではないか、と批判される面があった。それに対して三つの短編が描くのは、短編の「短さ」が要請する小さな時空間において、移動の断絶や待つといった行為を通じた、他者との別の出会い方にほかならない。結論として、名前を失った自己がどこまでも他者を受け入れるこの出会い方を「歓待」という概念と結びつけ、その固有名の喪失と他者の歓待という問題に、ロレンスにとって短編というジャンルがもつ意味を読み込めるのではないか、という解釈を提示した。

編集後記

周知のようにロレンスは『チャタレー夫人の恋人』を、「現代は本質的に悲劇の時代である」と始めた。彼が今、我々のこの時代を描くとしたら、どのように始めるだろうか。「不寛容の時代」とでもするだろうか。あるいはやはり「悲劇の時代」とするだろうか。

100年前と現在の社会を覆う空気は、意外と似ていたのかもしれない。どちらの時代も、ナショナリズムが胎動し、明るい見通しを持つことができない暗澹たる時代であった。『チャタレー』の舞台も、経済至上主義が幅を利かせる格差社会である。そしてその格差を背景に支配層と被支配層の間に恐怖と嫌悪が増幅され、埋めがたい相互不信の中でボルシェヴィズムという名のテロリズムの恐怖が社会を覆っている。もちろん100年前と現在とを単純に重ね合わせ、ロレンスに打開策を求めようとするのはいささか単純に過ぎるが、彼と我々が相似的な時代を生きている、との認識は、彼のテキストに対する新たな洞察や気づきへと導くこともある。

翻って、現代の作家の中で、ロレンスと同じように大きな射程で世界を捉え、この世界の病理を抉り出し、そして未来へと繋がる新たな扉を開けようと奮闘している作家は誰だろうか？ デレク・ウォルコット？ サルマン・ラシュディ？（彼自身、自分の故郷のことを頑なに「ボンベイ」と呼ぶので、「ラシュディ」としても許されるであろう）それとも石牟礼道子？ いずれにせよ、20世紀初頭と似て楽観的になれない、先が全く見通せない時代だからこそ、文学の存在意義は増し、またそれを読む我々の姿勢が問われている。

テキストの読み方、楽しみ方は人それぞれだろう。会員各位のご協力のもと、このジャーナルが、様々な視点、アプローチが交錯するフォーラムとならんことを切に願います。「希望を胸に抱いて——」。

* * *

今号は投稿論文が一件あり、編集委員会で議論したが残念ながら採用には至らなかった。投稿者には今回は厳しい結果となってしまったが、この機会にさらなる向上を目指し、今後『D. H. ロレンス研究』を支える一員となってくれることを委員一同期待している。

（編集委員長 岩井 学）

D. H. ロレンス研究 第27号

2017年3月20日印刷 2017年3月25日発行

発行者 日本ロレンス協会 学会番号 (10988)

代表者 浅井 雅志

編集代表者 岩井 学

印刷所 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麴屋町東入石不動之町
677-2

Tel. 075(343)0006 Fax. 075(341)4476

発行所 日本ロレンス協会

〒802-8577 福岡県北九州市小倉南区北方4丁目2番1号

北九州市立大学文学部比較文化学科 田部井研究室内

日本ロレンス協会事務局

Tel. 093(964)4205

Fax. 093(964)4133

e-mail : tabei@kitakyu-u.ac.jp

ゆうちょ銀行振替口座番号 01300-5-44587

(口座名：日本ロレンス協会)

<http://dhlsj.jp>

Japan D. H. Lawrence Studies

No. 27 2017

Special Topic

Paul Morel's "Lesser Arts": From William Morris to D. H. Lawrence

..... Yasuo KAWABATA

Gordon Comstock and Money: The Criticism of Mormonism in George Orwell's
Keep the Aspidistra Flying..... Yumiko FUKUNISHI

Study Note

Sleeping Beauty Plot in D. H. Lawrence's Short Fiction: Reading "The Horse-
Dealer's Daughter" and "Hadrian" Mitsuru YOKOYAMA

Book Reviews

Richard Owen, *Lady Chatterley's Villa: D H Lawrence on the Italian Riviera*

..... Akiko YAMADA

David Game, *D. H. Lawrence's Australia: Anxiety at the Edge of Empire*

..... Ayu KATO

D. H. Lawrence Society of Japan (ed.), *D. H. Lawrence in the 21st Century*

..... Hiroshi MUTO

Study Circle of D. H. Lawrence (ed.), *Reading Short Stories of D. H. Lawrence*

..... Tatsuro IDE

Yasuhiro Kondo, *A Genealogy of Reading: Critical Consciousness in D.H.
Lawrence, Raymond Williams, Doris Lessing, and John Fowles*

..... Fuhito ENDO

Ken Onodera and Hiroshi Muto (trans.), *Sons and Lovers* by D. H. Lawrence

..... Mitsuru MASHIGUCHI